

新魚目町文化財調査報告書第2集

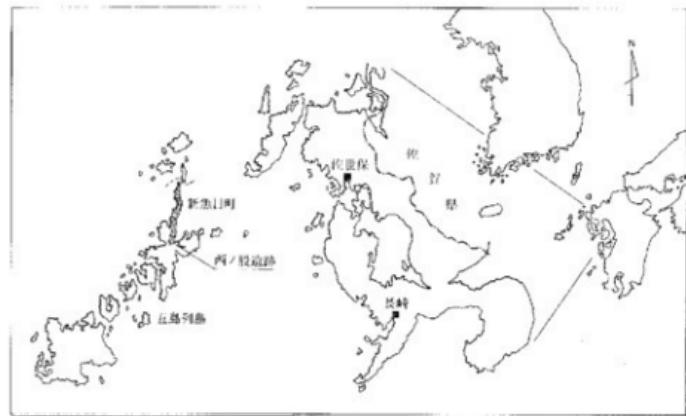
# 西ノ股遺跡

1988

長崎県新魚目町教育委員会

新魚目町文化財調査報告書第2集

西ノ股遺跡



1988

長崎県新魚目町教育委員会

## 発刊にあたって

このたび、当町の浦桑湾埋立に伴う緊急発掘調査の報告書を刊行することになりました。同湾一帯は、本町でも最も古くから人が住んでいた場所と思われ、以前から西ノ股遺跡と言われ、数多くの遺物が見つかっています。

そして今回調査した浦桑湾からも潮の引いた時、鐵・石器類が表採されていました。平地の少ない本町では、約十万平方メートルに及ぶ浦桑湾の埋立工事は、町政発展に欠かすことの出来ない事業で、昭和60年度着工が決定し、そのため発掘調査が緊急に必要となり、県の文化課と協議し、昭和60年2月に予備調査をしたうえ、同5月と6月の2回にわたって実施いたしました。短期間の上、海の中という悪条件の中で、本報告書として発表できるような成果を得ることが出来、誠に喜びにたえません。

はるか縄文時代から人々が生活を営んでいた跡が認められ、それが現在まで続いていることは、大きな驚きであり、感慨深いものがあります。この報告書が学問的にはもとより、私達の遠い祖先のこと、その生活ぶりや自然とのかかわり等を理解するために役立つことが出来るなら、この上ない幸せだと思っています。

最後になりましたが、この調査にあたり、ご協力をいただきました地元の皆様方をはじめ、調査の企画、計画実施にあたり、ご指導、ご協力を賜りました県文化課の諸先生方、中でも実際に現地で発掘調査にあたっていただいた同課の藤田和裕、久原巻二両先生には一方ならぬお世話になり、心から感謝を申し上げて、発刊のご挨拶といたします。

昭和63年3月

新魚日町教育委員会

教育長 福田 利八郎

## 例　　言

1. 本書は、昭和60年に実施した、長崎県南松浦郡新魚目町所在の、七日漁港（浦桑地区）埋立工事に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、新魚目町教育委員会が主体となり、長崎県文化課が協力して実施した。
3. 本書の執筆は分担して行い、岡もそれぞれが分担して作製した。各項の執筆者は文末に記している。
4. 調査関係者は以下のとおりである。

新魚目町教育委員会 教育長	福田利八郎
事務局長	山崎　均
社会教育係長	谷本　武夫
庶務係長	山口　道隆
社会教育主事補	原　靖昭

長崎県教育庁文化課 文化財保護上事	藤田　和裕
研修員	久原　巻二

なお調査にあたり、湯川界氏（新魚目町役場職員）大瀬良健二氏（現羽生建設）の援助をいただいた。

5. 調査中の写真および、遺物写真の撮影は藤田が担当した。
6. 報文作成にあたり、安楽勉・福田一志両氏にご協力とご教示を賜った。
7. 本書関係の遺物・図面・写真類は長崎県文化課が保管の任にあたっている。
8. 本書の編集は久原による。

## 本文目次

### I はじめに

(1) 調査に至る経緯	1
(2) 周辺の地形と環境	2
(3) 歴史的環境	4

### II 調査

(1) 調査の概要	5
(2) 土層の状況	8

### III 遺物

(1) 土器	10
(2) 石器	17

## 表目次

第1表 長崎県内の大珠出土地名表	18
第2表 石器計測表 (1)	37
第3表 * (2)	38

## 挿図目次

第1図	周辺の地形・遺跡分布図	3
第2図	調査区域図	5
第3図	土層図	9
第4図	出土遺物実測図（土器1）	11
第5図	(タ2)	13
第6図	(タ3)	15
第7図	(タ4)	16
第8図	(石器1)	17
第9図	(タ2)	18
第10図	(タ3)	19
第11図	(タ4)	20
第12図	(タ5)	21
第13図	(タ6)	23
第14図	(タ7)	24
第15図	(タ8)	25
第16図	(タ9)	26
第17図	(タ10)	27
第18図	(タ11)	28
第19図	(タ12)	29
第20図	(タ13)	31
第21図	(タ14)	32
第22図	(タ15)	33
第23図	(タ16)	34
第24図	(タ17)	35

## 図 版 目 次

図版1	調査風景・遺跡遠景	7
図版2	遺跡遠景	41
図版3	調査風景	42
図版4	調査風景・遺物出土状況	43
図版5	土層の状況	44
図版6	出土遺物（上器 1）	45
図版7	タ（タ 2）	46
図版8	タ（タ 3）	47
図版9	タ（石器 1）	48
図版10	タ（タ 2）	49
図版11	タ（タ 3）	50
図版12	タ（タ 4）	51
図版13	タ（タ 5）	52
図版14	タ（タ 6）	53
図版15	タ（タ 7）	54
図版16	タ（タ 8）	55
図版17	タ（タ 9）	56
図版18	タ（タ 10）	57
図版19	タ（タ 11）	58
図版20	タ（タ 12）	59
図版21	タ（タ 13）	60

# I はじめに

## (1) 調査に至る経緯

じょううめいの

西ノ殷遺跡のある新魚目町は、九州の西方海上に、ほぼ北東から南西に向いて横たわる五島列島の北部に位置している。十字形をした中通島の、縦に北方に伸びた部分を占め、南北約21km、東西は最も広い所でも3kmほどの、細長い形をしている。ほとんどが山地であり、森林・原野が地目の三分の二を占めている。山はすぐ海に落ち、平地は少ない。主要道路の多くは海岸線に沿って走り、外方との連絡は、有川からと吉方・奈摩方面からに限られ、海上からは佐世保からの船の便がある。

このような地勢・産業の状況であるため、各種施設を配置することのできるような平坦地の確保が町当局によって計画された。すなわち、七日漁港の海岸（浦桑地区）を埋め立てて、漁業関連施設用地・スポーツ公園・住宅用地・商業用地・工業用地として配置し、町勢発展を図ろうというものである。計画では、浦桑郷地先を埋め立てて、約92,400畝の土地を造成しようというものである。

このための環境調査が、昭和59年から始められたが、この地区における埋蔵文化財の散布について、全国遺跡地図11—3桑の木遺跡としてかなり以前から知られていた。遺跡の存在することを無視できない状況であったため、その取り扱いについて町当局の担当部局によって県文化課との接触が始められた。

すなわち、昭和59年11月、新魚目町助役・同企画課長・工事を委託される長崎県土地開発公社から県文化課への来訪があった。この時は、埋立による土地開発に対する理解を求められるとともに、計画の概要の説明がなされ、埋蔵文化財の取り扱いについての協力を依頼された。

昭和60年2月になって、文化課の担当職員等によって現地の状況が確認され、遺跡の取り扱いについての協議がなされた。その結果は次のようなことである。埋立予定地には、縄文土器片、石器などが散布しているが、その詳細については不明である。また、分布の範囲について確定するには無理がある。そのため

遺跡の内容・範囲などの状況の確認のため、試掘調査を早急に実施すること

その結果をもとに本調査の必要性を判断する

ということで、双方の合意が得られた。

その結果、新魚目町長によって「土木工事等による埋蔵文化財発掘に関する届出」が提出され、この間の協議により、発掘調査の主体は新魚目町教育委員会とし、県文化課は調査員として職員を派遣することで合意に達した。

昭和60年4月、新魚目町教育長名によって、埋蔵文化財発掘調査届が提出された。これを受けて文化課は昭和60年度の事業予定に組み込み、潮の干満の状況などから同5月になって試掘調査を実施することとした。

(藤田)

## (2) 周辺の地形と環境

西ノ股遺跡は、五島列島中通島の中央部、有川湾の最西端奥の海岸に立地する。行政上は、南松浦郡新魚日町浦桑郷字西ノ股・細間・松尾や宮ノ脇にある。町役場やフェリー発着場のある根津から約1.5kmほど南へあり、西の低い岬を越せば上五島町の首邑青方がすぐである。

五島列島は、長崎の西方約100kmに浮ぶ大小140余の島々からなる。新第三系の五島層群を基盤とし、火成岩の貫入や断層作用により、水平・垂直肢節とともに大きい複雑な地形をつくっている。

中通島は、五島列島の中では福江島(324km<sup>2</sup>)に次ぐ面積(169km<sup>2</sup>)をもち、南北38km、東西19kmを測る。ほぼ南北方向の主断層がいくつかあり、それに直交する断層線とでつくる湾入・河谷や鞍部で区分できる地盤の集合体で、胴部から四方に半島(地盤)のがび、略十字形の平面形を呈する。番岳(443m)が最も高く、山王山、高瀬斗山と雌岳の4座が400mをこす。山地は山麓が発達せず、山腹まで沈水して深い入り江や岬が多い。

有川湾内には、野集中島・山案中島・竹ノ子島や多くの瀬があり、天然の防波堤となって良港を提供している。南岸は出入が多く、岬にはさまれて船、筏車や浜には砂浜地形があり、砂堆が発達している。江戸時代には、鯨捕りが盛んとなり、大敷網も導入されて湾内の瀬には多くの網代が構えられた。

新魚日町は、中通島北端にあり、面積26km<sup>2</sup>、人口6,197、1,961世帯(昭和62年11月末)で、昭和35年(10,836人)をピークに入り減少がつづいている。町域は東西幅狭く、南北に21kmもある細長い地勢をし、山が海に迫る。両側に海をもつこともあり、水産業がさかんである。

浦桑郷は、町内8郷中最南部にあり、西は上五島町、南は有川町に接し、東は有川湾に面している。人口719、245世帯。主要地方道有川・新魚日線に沿って家並がつづき、北の丘陵を背にして片側路村の平面形をとる。東の森の木と、西の浦との2地区あり、遺跡は浦地区にある。西ノ股は、その名のとおり浦桑の西にあって、国道384号と主要地方道との分岐点である。県立上五島高校や県五島福祉事務所上五島支所がある。

遺跡周辺には、城山・浅子山や小島山の五島層群の低い山地があり、それらから伸びた支脚が低い丘陵となっている。この間を宮の川が南流し、湾奥に扇状地性の平地をつくっている。宮の川は、2km足らずの小河川であるが、町内最長で、町民の大切な水源ともなっている。平地は、標高25m位から広がり、南へ緩く斜面がつづき、4m以下はほぼ平坦となって海岸平野へ移行したことが想像される。周辺をあわせると、17ha近くのまとまった低平地である。

遺物は、この平地の南半部に多く、高校や祖父君神社周辺から海岸にかけてである。今回調査したのは、この海岸の潮間帶である。遺跡前面の入り江(七目漁港)は、速浅で、干潮時には砂浜が広がる。宮の川河口には、人頭大～拳大の蓮瓣礫が扇形に広がり、この中にも多量の石器、土器を認めることができる。

(久原)



### (3) 歴史的環境

現在、新魚目町8、有川町28、上五島町19の遺跡が周知されている。その内訳は、先土器（旧石器）時代6、縄文時代33、弥生時代11、古墳時代6、中世14となっている。

第1回には、西ノ股遺跡を中心とした有川湾岸の遺跡を示した。先土器時代の遺跡は、4の丸尾、6の西ノ股、7の釣道が知られる。丸尾遺跡は、番岳東麓の山裾から洪積台地にあり、ナイフ形石器、台形石器、細石核、彫器が採集されている。最終氷期の環境と当地の地理的位置を考えれば、重要な意味をもつ石器群との指摘もある。

縄文時代の遺跡は多く、豊かな海の幸を背景としたものであろう。しかし一般に小規模である。丸尾、西ノ股、釣道や15の上原から出土した石器については報告されたことがある。<sup>30)</sup>

弥生時代の遺跡は、有川湾南岸に多い。特に、14の浜、13の浜第2は砂堆上にあり、弥生前期～中期の櫛棺・壺棺や箱式石棺が検出され、60体をこす人骨と多くの副葬品が出土している。<sup>31)</sup>上原遺跡は洪積段丘にあり、浜邊跡被葬者の集落があったとされる。

古墳時代の遺跡は貧弱である。8の七目から須恵器が出土し、その南部調之浦から出土したという須恵器が、浦桑の常楽院にあるが、出土地が不明確である。

5の魚目城は、城山の山頂に主郭をもつ簡素な山城で、平安末～中世の豪城とされる。<sup>32)</sup>

古代から中世にかけては、佐賀・長崎両県の北部に宇野御厨庄が成立し、五島列島も含まれた。中通島（浦部島）の支配については転々とするが、13世紀峰氏の一円知行がになると、藤原家高が下沙汰灘として奈摩、ついで青方に居館を構え、青方氏と称した。<sup>33)</sup>

1655（明暦元）年、福江藩から富江藩が分藩されると、新魚目町城は富江藩に属し、魚目村（堀切村、浦村、桑村）、桙津村、似首村、小串村、藤首村の5ヶ村となり、まとめて魚目中あるいは魚目村とも称した。役所は、青方から桙津に移された。1661（寛文元）年、魚目中の村高は274余石とある。狹義の魚目村のうち堀切村の人家が明治期に絶え、浦・桑両村で浦桑郷を成立したという。明治初年の郡村誌によれば、魚目村は974戸、4,482人。明治6年の戸籍で浦桑郷は、144戸、720人で、現在より世帯数は少ないが、人口はほぼ同じである。<sup>34)</sup>

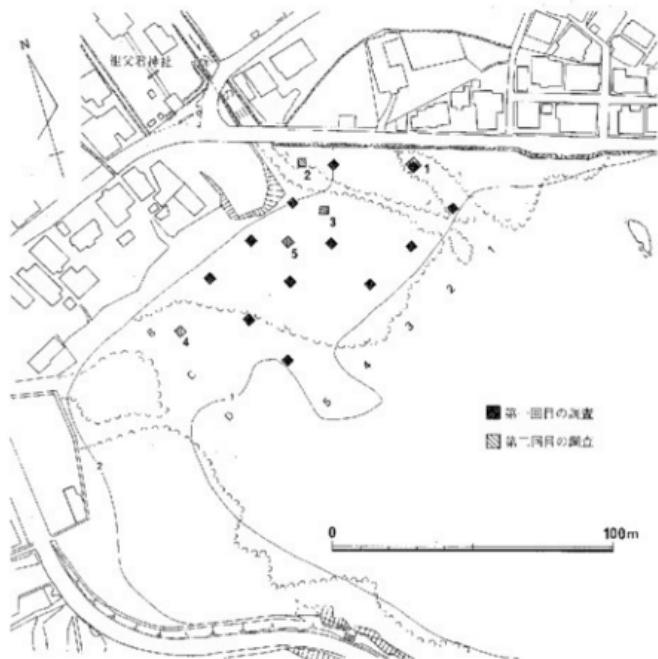
（久原）

- 註 (1) 長崎県教育委員会（1987）長崎県遺跡地図 長崎県文化財調査報告書第87集  
(2) 下川達彌（1979）日本最西端の旧石器資料 考古学ジャーナル167  
(3) 萩原博文・久原巻二（1975）九州西北部の石鋸・サイド・ブレイドについて 古代文化第27巻第4号  
(4) 小田富士雄（1970）五島列島の弥生文化一総説篇 人類学考古学研究報告第2号  
(5) 新魚目町教育委員会（1984）魚目城 新魚目町文化財調査報告書第1集  
(6) 上五島町（1986）上五島町郷土誌  
(7) 濑野・外山他（1987）長崎県地名大辞典、新魚目町（1986）新魚目町郷土誌

## II. 調 査

### (1) 調査の概要

昭和60年5月14日、長崎港から五島行きのフェリーで奈良尾港に上陸したあと、新魚目町へ向い、現地での調査は、5月15日の朝から開始した。午前9時、祖父君神社前に集合、作業員調査員の紹介や調査についての説明のあと、埋立予定地の海岸に $20\text{m} \times 20\text{m}$ の基準線を設定する作業から始め、同時に海岸での遺物の表面採集も実施した。基準線は、北西から南東に、陸から海の方に向けて、A・B・C……、北東から南西に1・2・3……とし、その交点の南東側に $3\text{m} \times 3\text{m}$ の試掘場を設定し、それぞれの名称とすることにした。試掘場を設定した範囲は標高1mから2mの間である。



第2図 調査区域図

調査はC列から開始し、潮の具合でB列の掘り下げにもかかった。16日にはD列も設定しておいた。日により、また、時間によって、潮の干満の状態が変化するので、陸に近くて、早く潮が引き、すぐ作業にかかるものから始めて、潮の引いた試掘壙へと移動し、ポンプで排水しながら調査を続けた。18日にはB-2試掘壙から刺突文土器のほか、ナイフ形石器・石錐などが出はじめた。

調査は、写真による、調査前の状況・調査中の状況・土層の状況・遺物の出土状況などの記録と、土層の状況の実測図の作製を行いつつ進めたが、このうち、土層の記録は、基本的には、東壁と北壁で行った。今回調査した地域は、満潮時には水没して、試掘壙が崩落する海岸の砂地であるため、一旦調査にかかると可能なだけの人員の集中を計り、記録措置を急ぐようにした。

調査が進むにつれ、各試掘壙から、多少の差こそあれ遺物が出土しはじめた。縄文後・晩期のものが多く、縄文前期・中期の土器や、僅かではあるが、旁生の土器も検出した。21日は午後からの作業で、縄文中期の土器片が出土した。B-5試掘壙からは22日、前期や中期の土器片が検出された。各種石器の出土も続き、その量は、土器の数倍に及んでいる。23日、24日は、調査のかたわら、一部の試掘壙を埋め戻しておいた。

第一回目の調査は、潮の加減で昼間の作業時間が大幅に少なく、事実上不可能となった5月24日で終え、25日、頭ヶ島にある上五島空港からノーマッド機で帰途についた。この回の調査箇所数は12箇所であった。

第二回目の調査は、昼間の作業が可能となった6月中旬から再開することとし、6月14日、長崎港から新魚目町に向った。この回は、埋立に伴う、擁壁の基礎工事部分を中心に調査を進めた。この時の試掘壙の呼び名は単なる番号にした。北から南方向に1から4までで、その後3と4との間に、5番目の試掘壙を設定した。17日には、第1試掘壙から縄文前期と思われる、W字形の突帯と刻みを持つ土器片が出土した。18日にも第4試掘壙から前期の土器が出土している。

この回の調査でも、このようにそれぞれの試掘壙から遺物が検出されたが、前回と同様、上流の上五島高校周辺からと思われる流れ込みの可能性が強く、遺構も検出されず、また、それに伴うものとも考えられなかっただため、これ以上の調査は必要ないものと判断し、この時点できちんと打ち切ることとした。

6月20日は埋め戻し、器材の片付け、遺物の整理、発送の準備等を行ったあと、関係部局への挨拶に回り、翌21日、長崎へ引き上げた。

(藤田)



調査風景



遺跡遠景(東方より)

## (2) 土層の状況

「地形と環境」の項でも述べたように、調査区は有川湾奥の宮の川が流れ込む地点に当り、河川と海との作用で堆積した土層から構成される。満潮時には水没し、土層にしまりがないうえに湧水が多く、グリッド壁面が極めて崩れやすく、細い土層図がとりにくかった。

第3図に土層図を示した。調査区の最大傾斜方向とその直交方向の土層である。第4層の見られた第1トレンチの土層図も示した。土層は大まかに4分され、いずれも砂礫を主体とする。第1～3層は、土器・石器を含むが、第4層は無遺物であった。

第1層、宮の川やその他の小河流が運搬したと思われる礫層。背後山地の丘島群の砂岩偏平礫からなる10～20cm大の円錐～亜角礫が多い。赤褐色～茶褐色の粗粒砂ないし小礫が充填し、しまりがない。表層に薄い海浜砂をのせる所もある。層厚は70cm前後が多く、最も厚い区で90cmあった。宮の川河口を離れるに従うくなる傾向にある。

第2層、黒灰色砂礫層。第1層に比べ礫が小さくなり、黒灰色～灰黑色砂が充填して明瞭に区分できる。ややしまりがある。調査区によって小さな変化がみられ、第1トレンチは、30～50cm大の巨礫が混り、C-3・4区には黒色砂や粘土層がレンズ状にみられ、多くの貝片や木片がみられた。B-5区では、最上部に川砂を思わせる粗粒砂や小礫が10～15cmの厚さであり、2'そして区分した。30～40cmの厚さがあり、B-5区のみ下限追求ができなかった。

第3層、黒灰色砂層。黒灰色をしたシルト質砂層で、しまりがなく流れやすい。多くの貝片（カキ・二枚貝など）、イルカの骨、磨滅の著しい木片等を含む。第1・2・4トレンチでは、50～60cm大の巨礫が時折みられた。第5トレンチやC-3区では、泥質となりぬかるような感じを受けた。C-4区では、砂が粗く暗褐色の縞模様やレンズ状の黒灰色粘土が部分的に見られた。このように各区で層相を異にし、砂礫層とした方がよい区もあった。第1トレンチでは、40～50cmの厚さがあったが、他区は崩落の危険もあり掘り下げての下限追求はできなかった。

第4層、黄色粘土混り礫層。最上面に青緑色の粘土層がうすくあった。第1～3層に比べ全く異なり、明るい黄色粘土に角～亜角礫（10～20cm大）が混り固くしまっている。ボーリング調査でも、第1トレンチ近くで確認されており「玢岩の風化粘土と思われる。固結状の粘土である」との所見が付されている。土色や固結度から、更新世の堆積物と考えた。

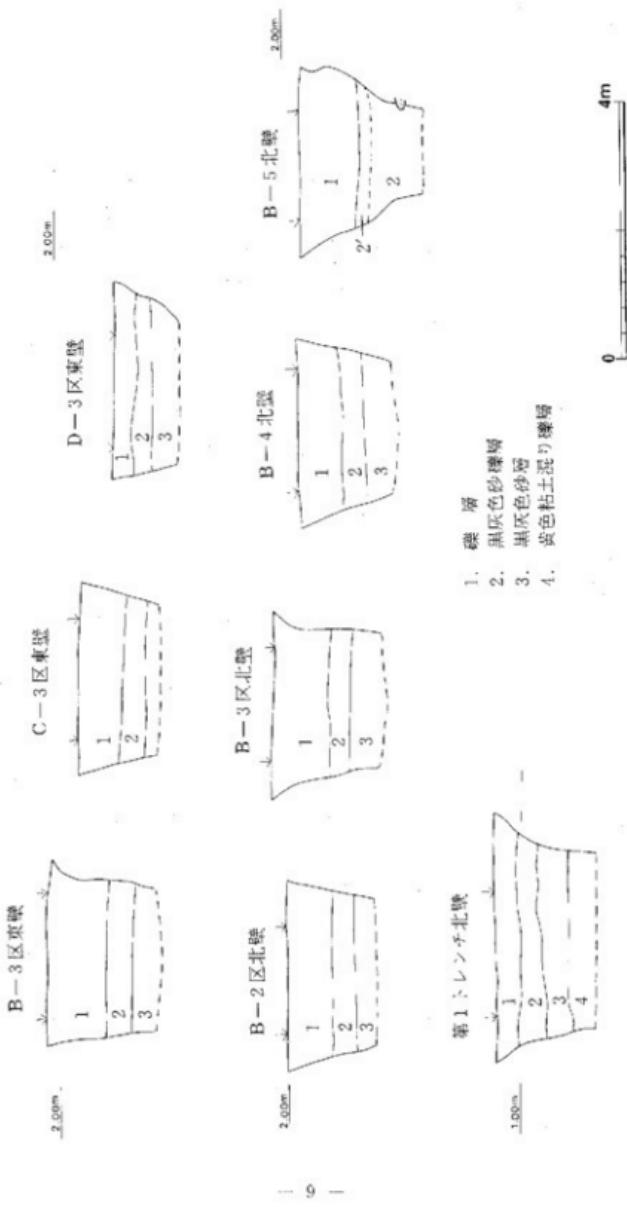
第1～3層は、現地形の傾斜と同じ傾きをもって堆積し、海面下の堆積というより河川による運搬堆積物の感がある。よく円磨された礫は少なく、亜円～亜角礫や粗粒砂が多いこともその証拠となろう。しかし第3層は、海水面付近の低湿地の状況を示していると考えられ、海水と河流とが交互に作用しながら形成された砂泥質の堆積物である可能性が高い。

磨滅を受けた遺物も多く、陸側からの堆積物に巻き込まれた形で遺物は二次堆積したと考えられる。

（久原）

註 (1) 基礎地盤コンサルタント株式会社 (1980) 浦桑埋立計画地域地質調査工事報告書

第3図 上層図



### III 遺 物

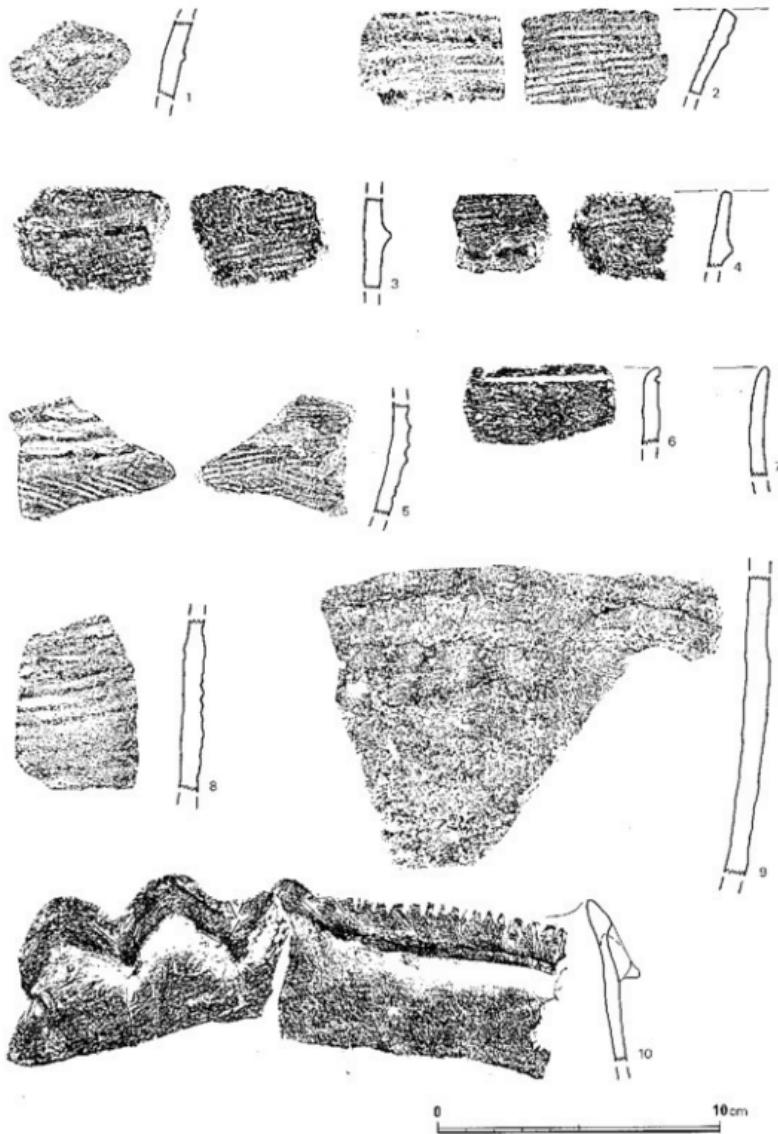
#### (1) 土 器

上層の項において詳しく述べている如く、今回の調査を実施した場所は浦桑の入江の最も奥まった海浜であり、満潮時には水没する地区での作業であった。今回の調査で出土した遺物の点数はかなりの量になるが、土器に比べ石器が大層多い。これは、まずひとつには、上流からの流れ込みの際の磨滅と細分化が行われた結果によるものと、また、波浪によっての同様の作用による破碎・磨耗などの自然条件によるものと考えられる。このことは、各試掘場での遺物の出土状況からも窺える。出土した遺物は、各層ごとに取り上げているので、その状況を表としてみたところ、表層から3層まで、全ての試掘場で時期的に混乱していく、土層による文化層としての前後関係については全く確実性がない。このため、遺物については各層ごとにではなく、各時代・器種別に取り上げて述べることにした。土器全部で300余点を採集したが、ほとんどが小破片で全形を残すものではなく、また時期的に判然としないものもある。このうちで特徴的なもの、器種の明瞭なもの、時代的に明確なものとして以下のものが図化できた。

##### 前期の土器 (第4・5図1~28 図版6・7)

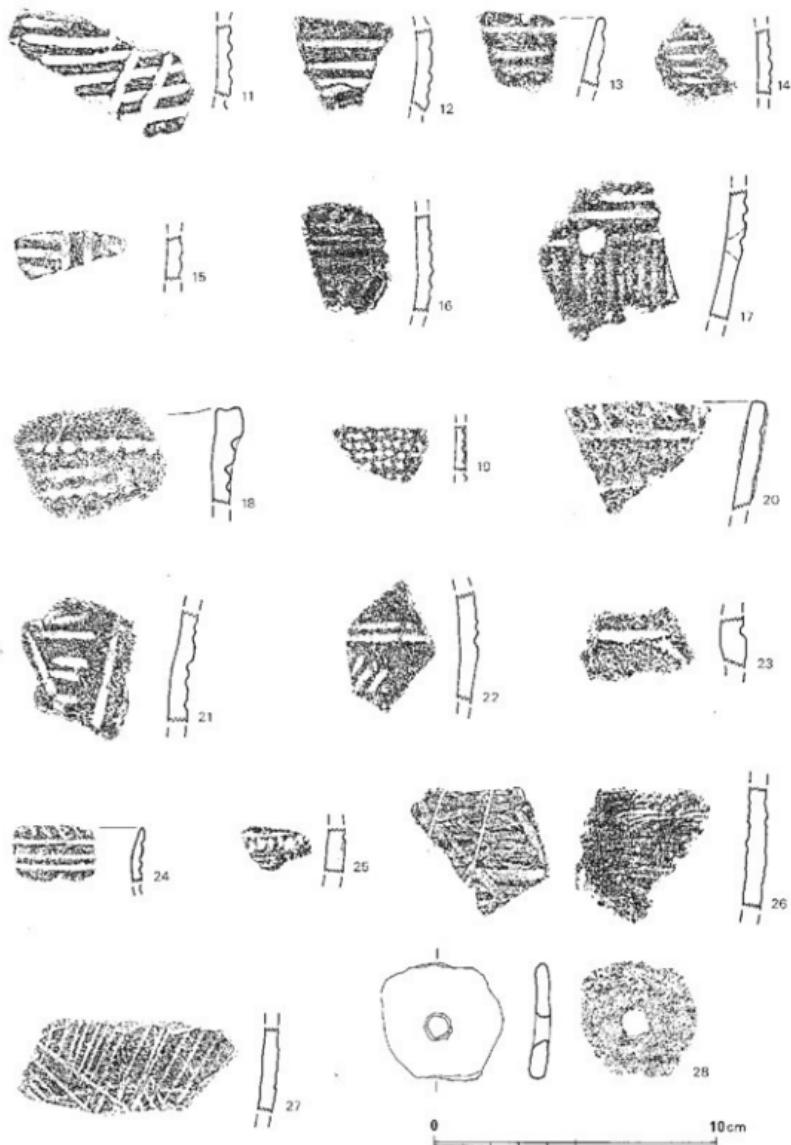
前期の土器としては轟式土器系統のものと曾畠式土器の系統のものが認められる。

1. いわゆる、みみずばれ状の細かい隆脊がめぐるが、内面は荒れていて不明。内面は灰褐色、外面は淡灰黒色を呈している。胎土に小砂粒が多い。2. 口縁部の上方とやや下方に隆帯を持つが器表が荒れていてもろい。内面横方向に条痕が残る。胎土に小砂粒を含み、内外面ともに黒褐色を呈する。3. 内外ともに茶褐色を呈し、隆帯をめぐらしている。内面の口縁部付近には横方向に条痕が残る。外面は磨かれている。胎土に滑石、小砂粒をわずかに含む。4. 同一固体か。5. 口縁部に近く、三条の隆帯文を横にめぐらして、その下側に斜めに条痕が付く。内面にも条痕が残る。全体的に濃い灰褐色を呈する。胎土・焼成とともに良好である。6. わずかに外に反る口縁端部のすぐ外下側に細かい沈線がめぐる。内外面ともナデで仕上げたような痕跡が残る。全体的に灰褐色でやや淡い。胎土に滑石を含む。7. 薄手の作りで、先端部を丸くおさめている。文様は認められない。全体的に濃い褐色を呈している。器表が荒れているが外面はナデで仕上げたか。胎土には小砂粒を含む。8. 全体的に濃い黒褐色を呈し、横に幅2~3mmの条痕が残る。さほど大きな破片ではないが湾曲が少なく扁平な感じで、角形に近いもののような感じを受ける。南九州系のものであろうか。9. 上部の復原径は38cmほどの大きさになる。外面は短くヘラ様のものでの削り、内面は横方向に長く削って仕上げている。胎土に滑石を含み、全体的に濃い灰褐色を呈している。焼成は良い。無文であるが滑石を含む点や、仕上げの特徴から轟式土器の系統のものと考えられる。10. かなり大きな破片である



第4図 出土遺物実測図（土器 1）

が十数片に割れている。やや下方に垂れ下がる形の大きな突帯をめぐらしていく、その先端にヘラ様のもので7cmの間に16本の刻みを入れている。さらにその一部を「W」字形に盛り上げている。内外面とも横方向へ丁寧にナデて仕上げていて、器壁の厚さは5mm内外と薄い。胎土に多量の滑石が混じる。全体的に灰褐色を呈し、一部にスヌが付着している。口縁部下での復原径は50cmほどになるものと思われる。この「W字に近い突帯」と「刻み」を持つ土器は、毫岐の名切跡道で出土している。11. 横方向への沈線文が施されたあと、斜めにも付けられている。5mmほどの厚さで、滑石を多く含む。色調は濃い灰褐色を呈している。12. 内外ともナデたあと、沈線文をめぐらせていている。濃い灰褐色を呈し、滑石を含む。胎土、焼成とともに良い。13. 口縁部である。横方向にやや浅い沈線文が付く。灰褐色で、雲母、滑石を含み焼成は良い。14. 薄手の体部に細い沈線文をめぐらしている。内面はナデて仕上げている。内外面とも茶褐色を呈し、胎土に滑石を少量含む。15. 横、縱方向に浅めの沈線を持つ。滑石の混じる胎土で、濃い灰褐色を呈する。焼成は良い。16. 横、斜め方向に、やや浅い沈線文がはいる。滑石が混じり、薄手の作りである。淡い灰茶色を呈する。17. これも縦、横方向にわりと浅い沈線文を持つ。外側から穿孔しており、補修孔と思われる。滑石が多く、なめらかで、濃い灰褐色を呈する。18. 口縁部を肥厚させる形のもので、先端をくぼませている。そのまま下に円形の刺突列点文をめぐらせていている。内外面とも横にナデて仕上げたものか。全体的に黒褐色を呈し、胎土に小砂粒を含むが、滑石の混入は認められない。焼成は良い。19. 薄手の作りで、刺突列点文を5列以上配する口縁部付近のものである。内面はナデて仕上げている。内外面とも黒褐色を呈し、胎土に滑石を含む。20. 口縁部で、斜め方向に細めの沈線文がある。これは爪形のようにも見える。このすぐ下に横方向への沈線文が入る。表面にはスヌが厚く付着し、黒褐色を呈している。胎土に滑石を含む。焼成は良い。21. 横、斜め方向に沈線文を配したものであるが、線の方向に乱れが認められる。内面はナデて仕上げている。濃い灰褐色を呈し、雲母の小粉と思われるものが、わずかに認められる。焼成は良い。22. 内外面ともナデて調整したあと、横、斜め方向に細い沈線文が入る。全面黒褐色を呈し胎土に滑石を含まない。焼成は良い。23. やや厚い体部に細めの沈線文を施している。全体的に黒褐色で、胎土には石英粒などを含むが滑石は認められない。24. 薄い作りの口縁部で、その先端は尖り気味におさめている。口縁部外面に短い小さな沈線文を斜めに施し、その下にこれも小さな沈線文を横にめぐらしている。胎土に滑石が少し混じる。濃い灰褐色を呈する。25. 3cm×2cmほどの小破片である。横に細かい沈線文があり、それにはほぼ直角に短い沈線文を施している。胎土には滑石を含まない。26. 器表面は条痕様の荒い調整で、このあと斜行する平行直線の細かい沈線文を入れている。内面には荒い条痕文を残している。内外面とも黒褐色を呈し、胎土には滑石を含まない。27. 内外面ともナデたあと、ヘラ様のもので細かい沈線文を入れている。内外面とも濃い茶褐色を呈し、胎土、焼成とともに良いが、滑石は混じらない。28. 薄手の土器片を利用した紡錘車と思われる。茶褐色を呈し、胎土に滑石が混じる。



第5図 出土遺物実測図（土器2）3/4

### 中期の土器（第6図29～37 図版7・8）

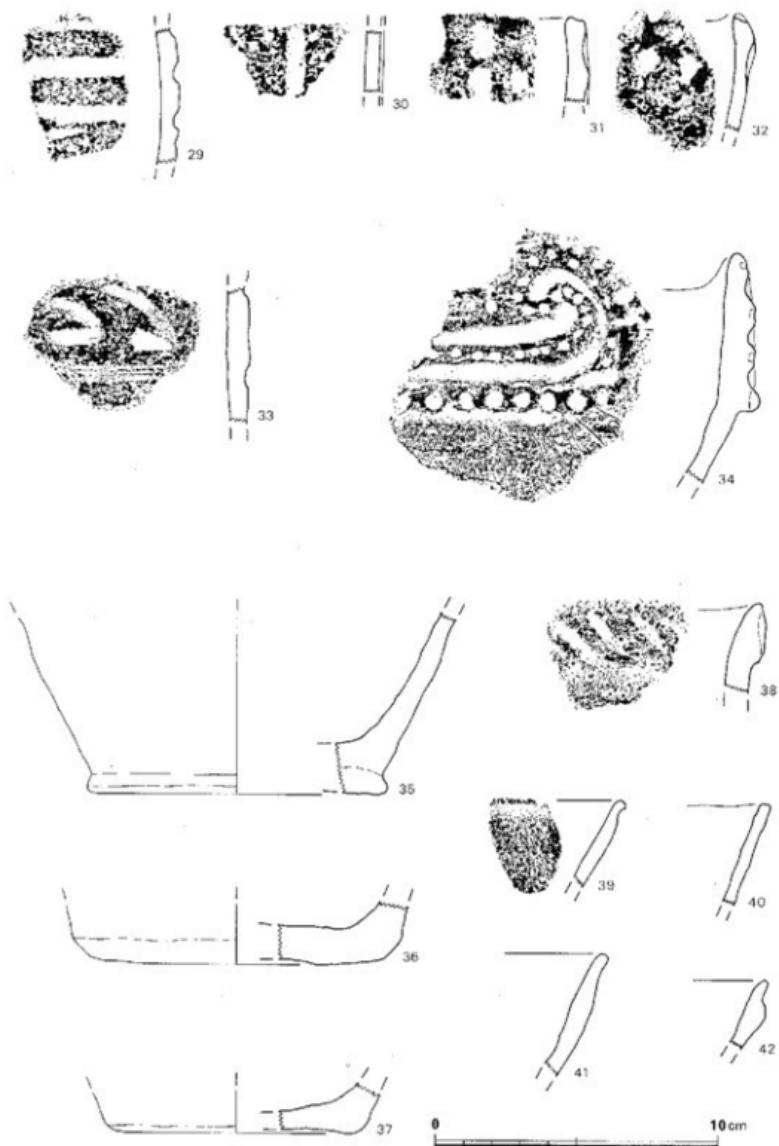
29. 太形凹文を持つものである。内面は丁寧にナデて仕上げている。厚さはやや薄い。茶褐色を呈し、胎土に滑石を混じえている。30. 太形の凹文を持つもので内面はナデしている。全体的に濃い褐色を呈していて、胎土に滑石を含む。31. 縦長椭円形の凹点文を口縁部下にめぐらすものである。滑石を含み、濃い茶褐色を呈する。32. 薄手の作りで、口縁部をやや肥厚させてその一部をつまみあげている。更にこの部分には刻目を入れている。内面はナデて仕上げ、外面には楕円形の凹文が付けられている。胎土に滑石を含み、黒褐色を呈している。33. 凹線の文様を入れたもので、逆「く」の字形のものを配し、この下にも横方向に凹文をめぐらしている。内外面ともに黒褐色で、胎土に大きめの滑石粉末をかなり含む。34. 装飾の多い土器の口縁部で、丸く盛り上がった飾り部分にもヘラ様のもので刻目を入れている。突帯上部の面は棒状のもので凹線を施し、この間のすき間に、これもまた細目の棒状のものの先端部で刺突文を施している。突帯にも棒状のもので刻目を入れている。内側はヘラ様のもので削ったかのような痕跡を残している。滑石を含み濃い茶褐色を呈している。

### 底部 35～37

いずれも破片からの復原である。35は底が外方に張り出す形のもので、36・37は丸く仕上げられるものである。35. 平らな底から直線的に伸びる脚部が付くものである。内面は削りで、底部付近はナデたような痕跡がある。外面もナデたか削ったかの痕跡が認められる。胎土に大小の砂粒を含むが、焼成は良い。全体的に暗茶褐色を呈する。36. 厚手の作りで、滑石を多く含み、黒褐色を呈している。整形の状態は判然としないが、ナデて仕上げたものと思われる。37. 磨耗がひどく、内外面とも荒れていて整形の状態など不明。全体的に茶褐色で、胎土に小砂粒を含む。

### 後・晚期の土器（第6・7図38～44 図版8）

38. 北久根式と考えられる土器の口縁部で、肥厚させた部分に斜めに刻目を入れている。海中部分での表探であるため器表が荒れ、調整等不明である。内面は淡い茶褐色、外面は淡い黒褐色を呈している。小砂粒を含むが焼成は良い。39. 鉢形土器の口縁部で、先端部は丸くおさめている。全面ナデかミガキで仕上げているようで、黒褐色を呈している。胎土に小砂粒を含むが焼成は良い。40. 鉢形のものになるものと思われる無文の口縁部である。濃褐色で内面はヘラ様のもので削ったような痕が、外面は指先でナデたような痕が残る。胎土に石英の小さな粒が混じるが焼成は良い。41. 先端を丸くおさめた口縁部である。内外面ともヘラ様のものでナデたような痕跡が残る。茶褐色を呈し、胎土、焼成ともに良い。42. 晩期の鉢形土器の口縁部である。細目の口縁端部すぐ下が厚くなる形である。内外面ともに荒れているが、一部にミガキ痕が認められる。全体的に茶褐色で、胎土、焼成ともに良い。43. 口縁直下をわずかに厚く作った深鉢形のものである。器壁は内外面ともに横方向にナデしているが、外面下方には条痕が残る。復原口縁径は43cmほどである。外面は黒褐色で、スジがほぼ全面に付着している。内



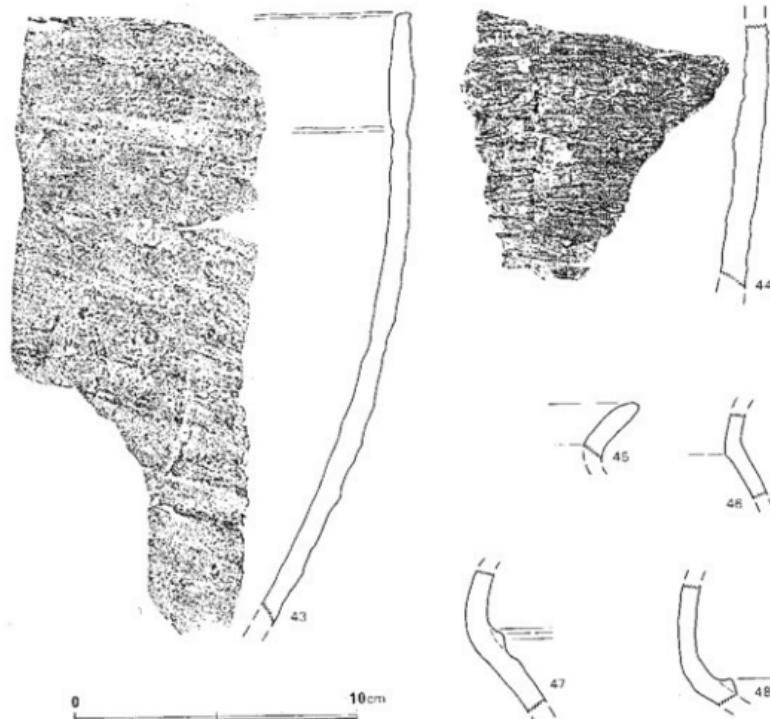
第6図 出土遺物実測図（土器3） $\frac{3}{4}$

面は灰黒色を呈している。胎土に小砂粒や貝殻の粉末を含み、焼成は若干不足気味である。

44. 深鉢形の土器の頸部で、内外面ともに荒い条痕を残している。内外面とも茶褐色を呈し、胎土に小砂粒や貝殻粉を含む。焼成は良く堅い。

45~48は弥生式土器の、いずれも口縁部とその付近である。45. 丸くおさめた端部を外湾させる口縁部で、全体的に茶褐色を呈している。胎土に小砂粒を含み焼成は良い。46. 小形の壺の頸部である。くびれの部分はナデて仕上げているが、他の面は荒れている。全体的に茶褐色で、胎土、焼成とともに良い。47. 壺形土器の頸部であるが磨耗が著しく、からうじて三角形に近い突帯をめぐらしていることがわかるにすぎない。また、この突帯には左下向きの刻みの痕跡が残っている。内面は濃茶褐色、外面は茶褐色を呈する。胎土に小砂粒を含むが、焼成は良い。48. これも三角形の突帯をめぐらした壺形土器の頸部であるが、全面たいそう荒れていて黒褐色を呈する。石英粒などの砂粒が目立つ。堅いのは、潮のせいとも考えられる。

(藤山)



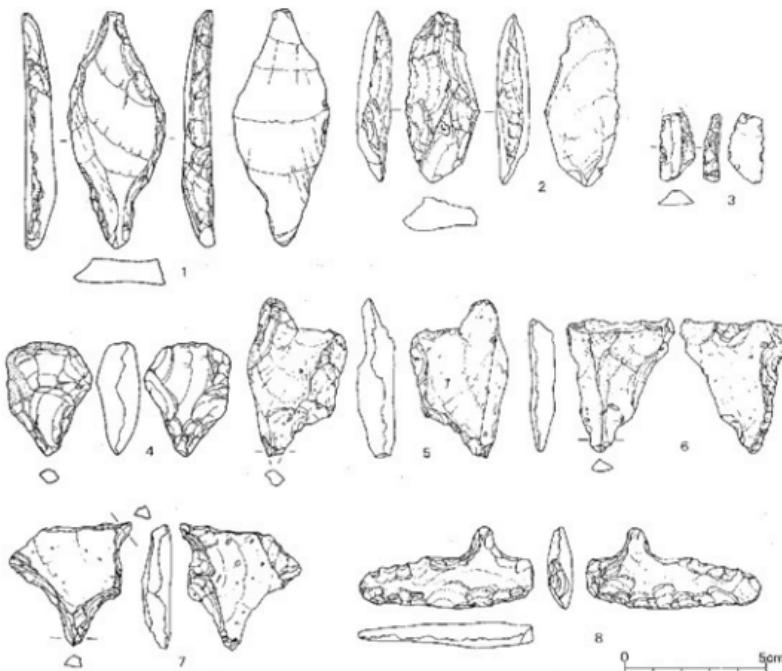
第7図 出土遺物実測図（土器4）36

## (2) 石 器

調査において3,300余の石器・剝片が出土し、表面採集を加えると3,500点以上が出土した。そのうち182点について図示した。

**ナイフ形石器（第8図1～3）** 1. やや大形の縦長石刀を素材としている。背部全部と基部とに二側刃加工を施し、基部には弱い抉りを入れて茎部をつくり出している。刃部から先端にかけて少し欠損している。剝片尖頭器状の概観をもつ。2は横長の不整形剝片を利用したナイフ形石器。基部と先端の一部に簡単な刃潰し加工を行い、木葉形に仕上げている。3. 小形の縦長石刀の先端を切るようにプランディングを施している。磨滅が著しい。1・2は安山岩、3は黒曜石である。

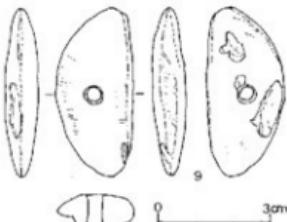
**石錐（第8図4～7）** いずれも不定形の横長剝片の一端を刃部としている。4は分厚い剝片の周縁を加工して断面菱形の錐部を作り出している。5・6はつまみ部を幅広い略三角形にし、刃部加工は粗い。7. 板状の剝片を利用して、2つの錐部がつくられている。



第8図 出土遺物実測図 (石器1) 32

**石匙**（第8図8） 1点のみ出土した。やや玻璃質の安山岩を利用した横長削片を素材とし、全体にていねいな調整がされている。ローリングが著しい。

**大珠**（第9図） 調査に先立つ下見で表面採集された。明るい褐色を呈する瑪瑙で、透かしたような白い小斑点がある。全面よく磨製され、鍔節型に整形してある。直徑5mmのほぼ真円の孔が直角に穿たれ、一面には穿孔痕がみえる。2ヶ所新しい傷がある。第1表に鍔節型大珠の主な県内出土地を示した。西彼杵半島産の変成岩を石材とした例が多い。本例は、大きさでは狸山支石墓出土品に似ている。



第9図 出土遺物実測図（石器2）

第1表 長崎県内の大珠出土地名表

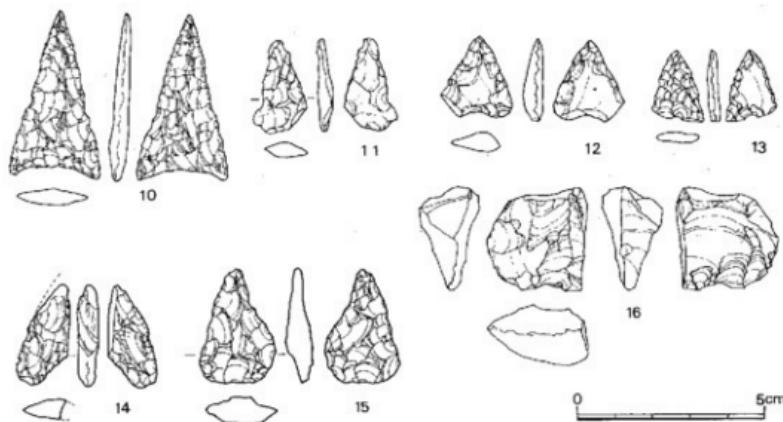
出土遺跡	出土状況	法 量(mm)			時 期	石 材	備 考	文 獻
		長 さ	幅	厚 み				
出津遺跡	包 含 層	64	25	15	縄文後期	蛇紋岩	外海町教育委員会(1982)「山浦遺跡」	
	+	70	32	10	+	清 石	他に変成 品1点	(1983)* + 』
佐賀貝塚	+	63.2	28.2	6.45	+	砂 岩	16.5g 木が残る	越町教育委員会(1986) 「佐賀貝塚(略報)」
狸山支石墓	第3号支石墓	44.15	19.4	9.95	縄文晩期	滑 翠	18.35g	森貞次郎(1966)「長崎縣・狸山支石墓」 九州考古学5・6
大野台支石墓	第36号遺構	90	22	18	+	綠色 岩	半 折	鹿町町教育委員会(1983)「大野台遺跡」 重要遺跡認定証記念章
諫早市小野町	表面採集	37	15	9	不 明	蛇紋岩	半 折	*
西ノ股遺跡	+	45.0	21.0	8.7	+	瑪 瑙	11.5g	本報

**石鏡**（第10図10~15） 他の器種に比べ少なく6点しかなかった。10は漆黒色の良質黒曜石を利用し、うすく精緻な両面加工がされている。11~14は破損品で、いずれも磨滅が著しい。15は周縁からの加工が届かない中央部にコブ状の高まりが残り、底の丸い三角鏡である。

**楔形石器**（第10図16） 上下両端と一側辺に三方向から剝離痕があり、他の一辺は截断面である。上端はやや平坦で、縦断面が略三角形をなす。三辺とも微細な刃済し状の痕跡がみられ、特に上端の漬れが著しい。

**石槍**（第11・12図17~29） 13点が検出され、全て図示している。全て安山岩を石材としている。これらの中には、「石鉤」とされた石器も含むが、ここでは石槍として扱った。13点を3つに分類してみた。I類、先端・基部ともに尖り、基部をもつもの。II類、ほぼ木葉形の平面形をもつもの。III類、基部が平坦で、両側辺を加工して尖頭部を作り出したもの。

I類には、21・28の2点がある。21は両面全体にやや粗い加工を施して概形をつくり、さらに周縁調整をして基部と尖頭部を形成している。いわゆる「蝮頭狀」の石槍である。28は左右非対称で、基部も不明確であるがI類とした。最終加工段階での剝離が大きくなりすぎて下半部全体に及び、その加工を補正する事で基部が生まれ、片側に肩状の凸部が残ったと思われる。



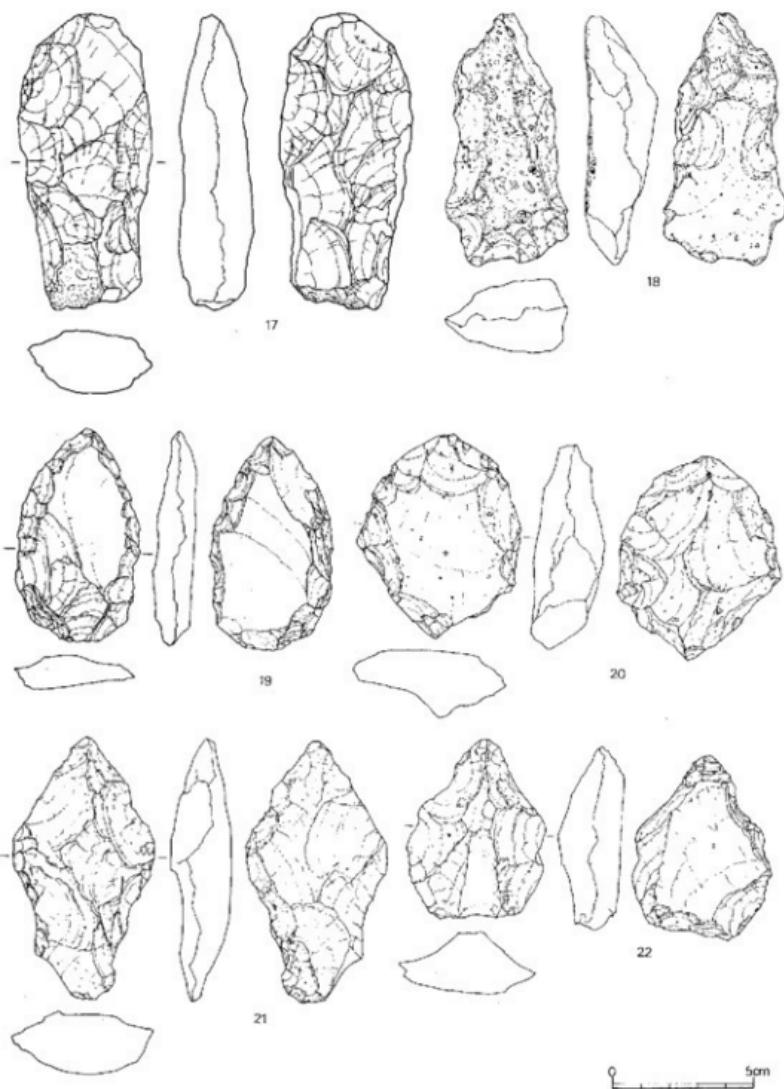
第10図 出土遺物実測図（石器3）%

意図的に基部を作ろうとしたのではなさそうである。

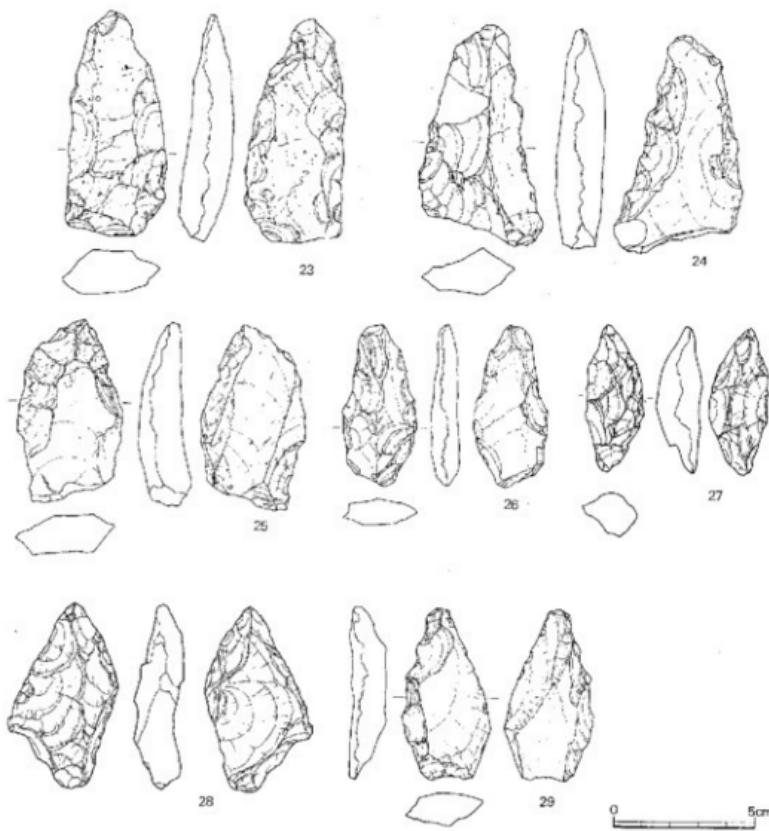
Ⅱ類は、19・20・26・27の4点がある。19はⅡ類の典型であり、周縁に浅い調整加工を連續的に行い、下ぶくれの木葉形に仕上げている。20は幅・厚さとともに大きく、先端角も120°と大きいが、周辺加工が尖鋭化を意図しているように考えられ石槍とした。26は磨滅が著しく、先端と基部を少しづつ欠損している。27は両側から急傾斜の調整加工がされ、幅の割に厚みがある。26・27ともに斜軸である。

Ⅲ類は、17・18・22～25・29の7点がある。一次面や自然面が一部に残り、側辺加工中心に仕上げられている。17は13点の中では最も大きい。基部には自然面がみられ、細く平たい礫か厚手の剣片を素材としている。先端は凸レンズ状の断面形であるが、基部は楕円形を呈する。基部の側辺加工が強く行われ、基部を作り出すようにしているからであろう。18は厚手の横長剣片を利用し、背面には自然面が残されたままである。主要剣壁面側からの加工が浅く急傾斜であるため、広い自然面が残っている。打瘤部の高まりも除去されておらず、反った側面観をとっている。22は厚くて幅広い基部から、細く尖がらせた先端部を作り出した形をとる。先端部は潰れたように欠損している。23・24・29は、横長剣片の側辺だけに浅い加工を行い、基部は切断されている。25は縦長剣片の打点部をそのまま利用して基部とし、先端は片面加工で尖頭部を作っている。

13点の石槍を平面形をもとに3型式に分けたが、さらに素材・調整加工などで細分類も可能である。また全てが同一期の所産とは考えにくい。



第11図 出土遺物実測図（石器4）



第12図 出土遺物実測図（石器5）½

スクレイパー類（第13～19図30～135） 182点挿出した石器のうち、58%の106点を占める。削器・撓器と呼ばれるものを含め、不定形の石器も取りあげた。型式は様々であるが、素材と刃部のあり方で次のように分類してみた。

I類 長側辺を主な刃部として利用したもの。サイドスクレイパー。31点ある。

II類 横長剥片や寸づまり不整形剥片の一端に刃部をもち、素材をほぼ残す。24点。

III類 やや厚手の素材に刃部加工を施し、その刃部と直角に折断されたもの。9点。

- IV類 横長剝片の両側辺を切って長方形に整形し、一長辺にゆるい凹刃をもつもの。3点。
- V類 交叉する2つの切断面で略三角形の素材を作り、他の一辺を刃部としたもの。8点。
- VI類 剥片を切断し、切断面以外に全て刃部加工がされたもの。5点。
- VII類 周縁に加工が施され、ほぼ全周が刃部とみられるもの。8点。
- VIII類 片面加工の急角度の刃部をもつもの。3点。右側辺に自然面をもつことでも共通。
- IX類 IX類同様厚手で、やや鈍い凸刃をもつ。6点。
- X類 大形の横長剝片を三角形に整形し、一辺に片面加工の刃部をもつもの。3点。
- XI類 その他。6点。

I類は、30~49、106~114、118、119がその例である。これらはさらに次の4つに細分される。一偏辺のみを主な刃部としたもので、30、31、33~38、43、44、46の11点がまずあげられる。次に向い合う二辺、つまり両側辺を刃部としたもので、32、41、42、45、106~114、118、119の15点がある。3番目に、同じく二側辺を刃部加工しているものの、刃部が尖頭状となったもので、47~49の3点を例とする。最後に、隣り合う二辺に刃部加工し三角形となったもので、39と40である。刃部とならない他の一辺は、自然面になっている。

II類は、50~70、72、73、75がその例である。ほとんどが横長剝片の一端を刃部としたものであるが、56~59のように寸づまりの縦長剝片を利用して、先刃をもつものもあり、60~64のようにコア・フレイクの先端に凸刃を作ったものもある。

III類は、71、74、76~82である。前述のように、刃部とほぼ直角に切斷されているのが特色で、長脚台形をなし、その底辺が刃部となる。使用により折れたのか、目的的な切斷かは不明。また切斷した剥片に刃部加工したものもある。

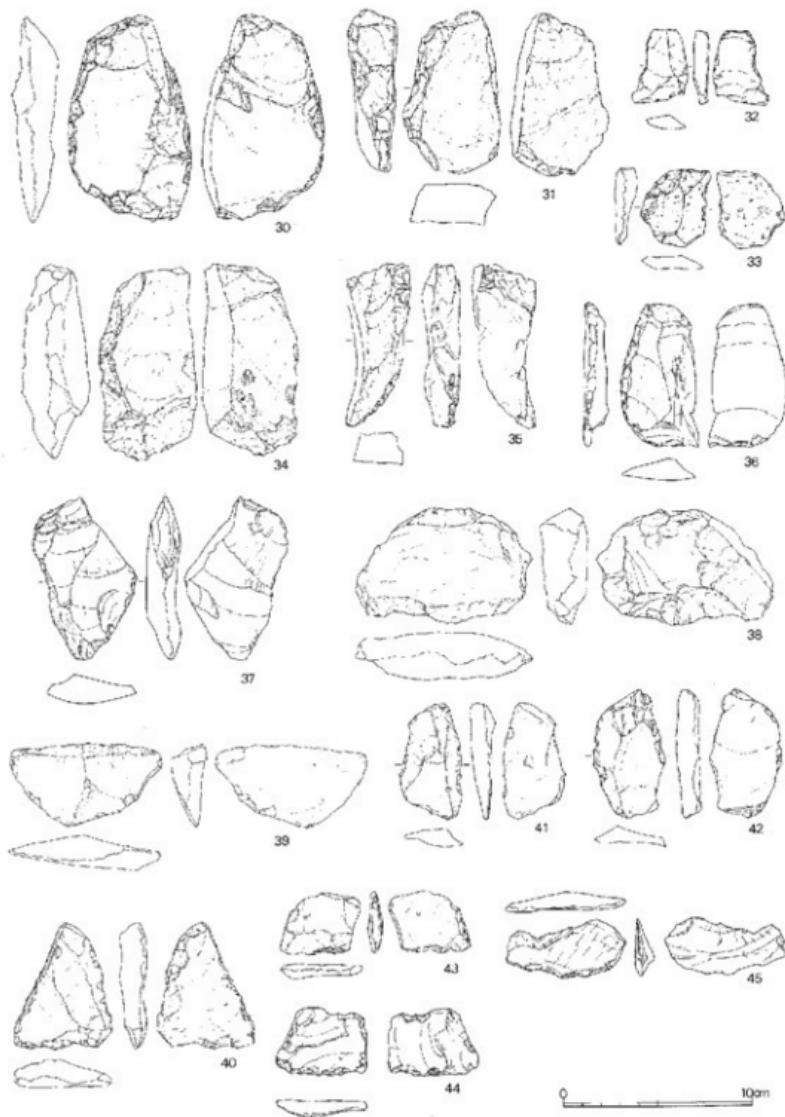
IV類、83~85。V類、86~92、133。2つの切断面は、頂点から極状剥離状に切斷したもののが、88、90、133の3点、他は裏面どちらかからの打削によっている。

VI類、93~96、100。III・IV・V類同様切斷された小剝片を利用してしている。III・IV類と異なるのは、切斷してできた辺以外全てに刃部加工がされていることで、V類とは切断面がひとつということで区別される。

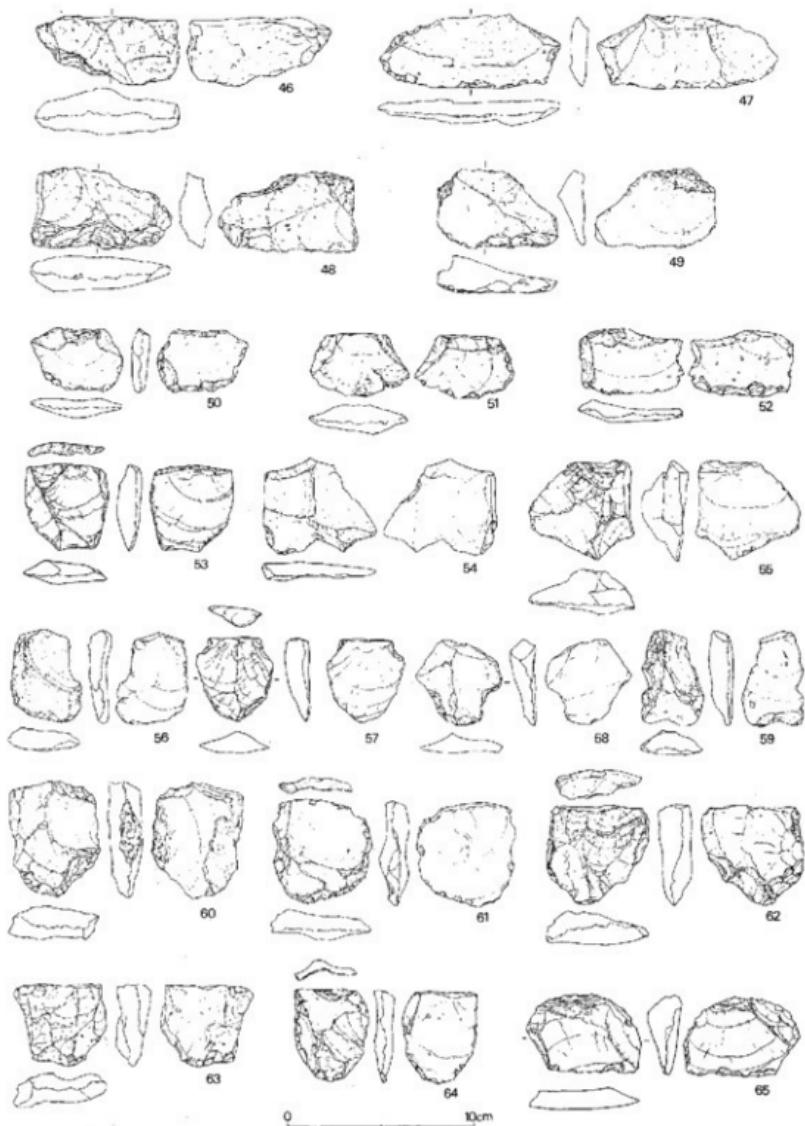
VII類、97~99、101~105である。いわゆるラウンド・スクレイバーで、円形・四辺形・三角形のほぼ全周が刃部である。101はスクレイバー類の中で唯一の黒曜石製で、直径4cmほどの偏平な円盤原石を利用した石核の転用と考えられる。

VIII類、115~117。IX類、120~123、126、130。いずれも重量のある石器で、尖頭石器あるいは石斧としてもよいぐらいである。X類、124、125、127。

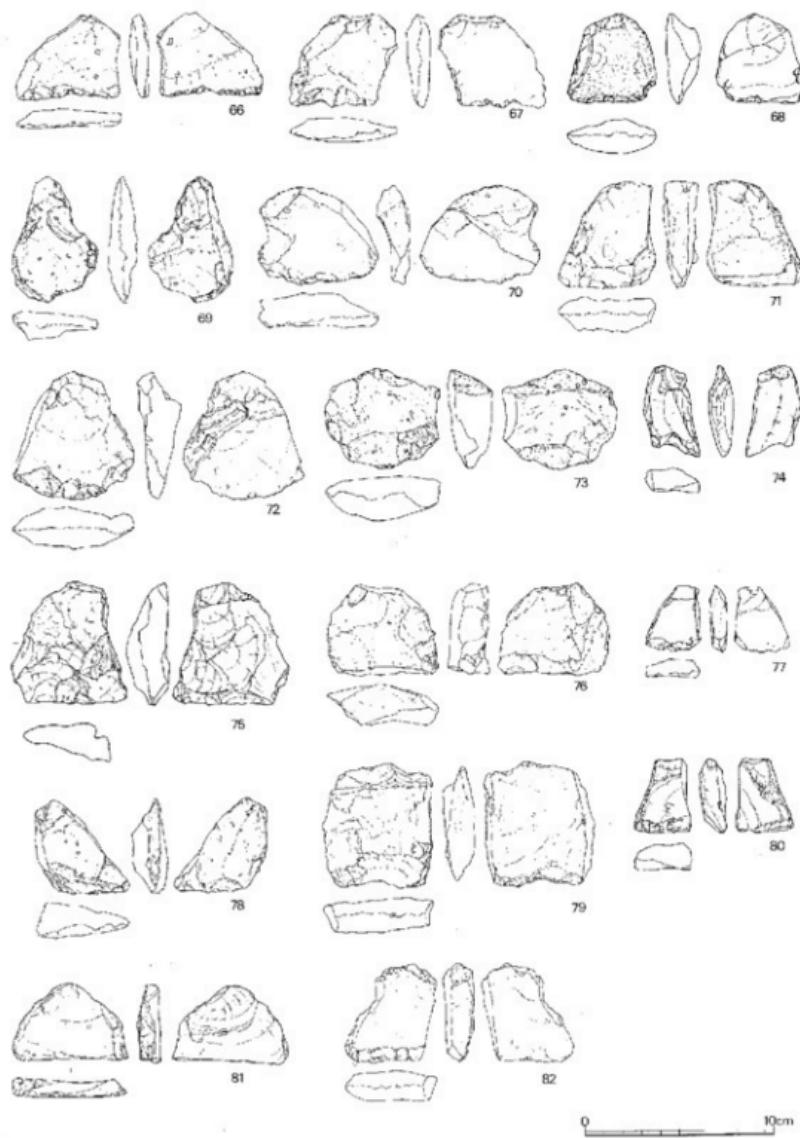
XI類、128は大形の横長剝片の一長辺に刃部をもつもので、スクレイバー類の中では最も大きい。129は鋭い一次面は残したまま、両側辺に調整加工を行い、直刀斧様に仕上げている。131、132、134、135はいずれも横長剝片の破片を利用している。131、132は片面加工の凹刃、134、135は円刃が作られている。



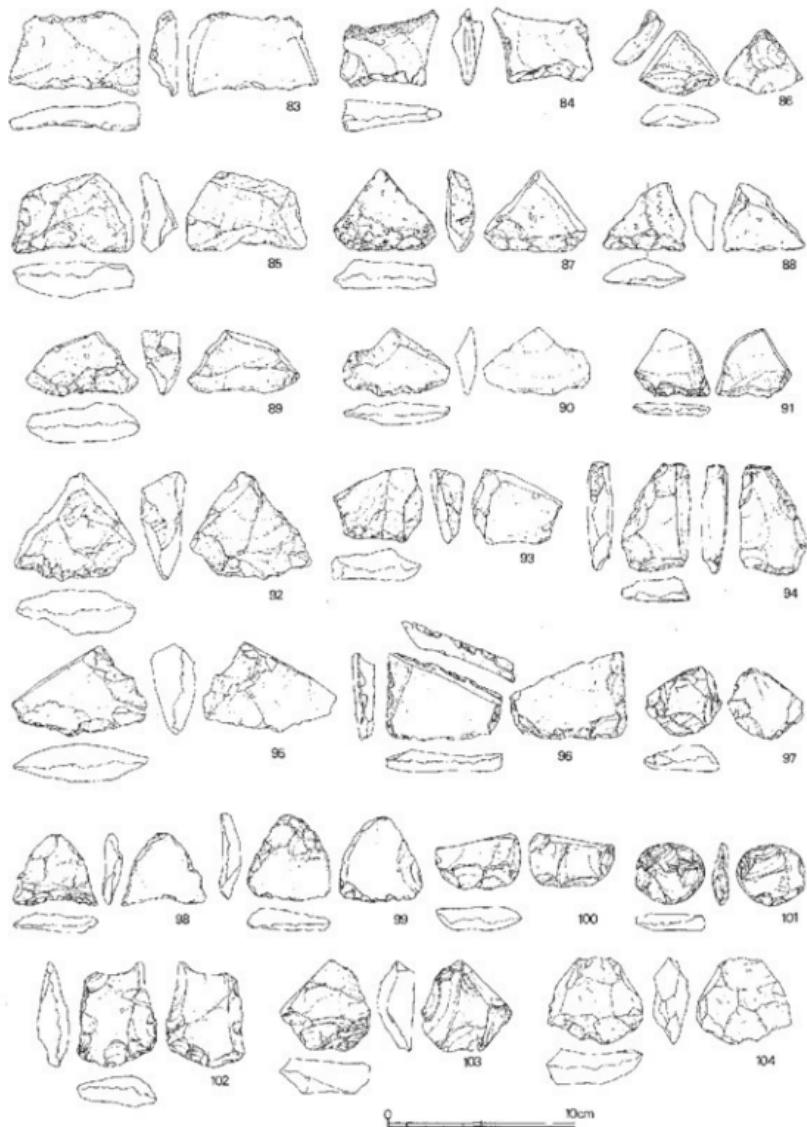
第13図 出土造物実測図（石器6）%



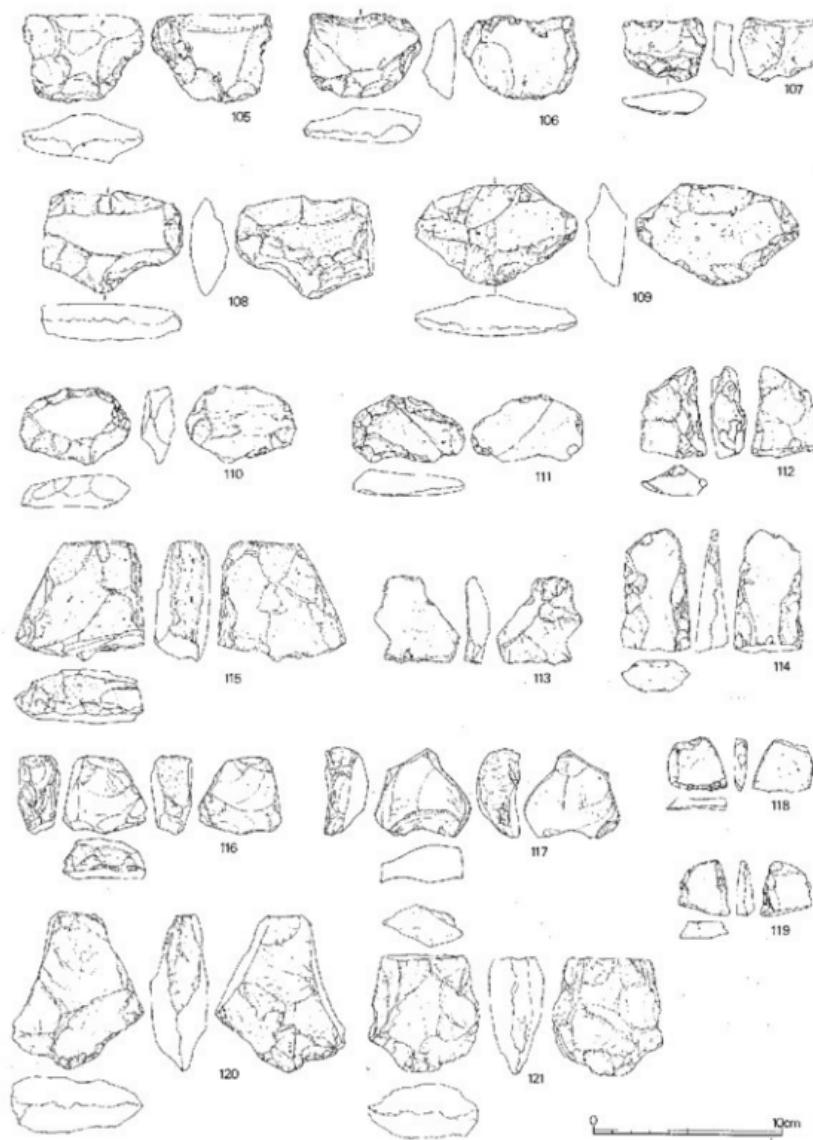
第14図 出土遺物実測図（石器7）36



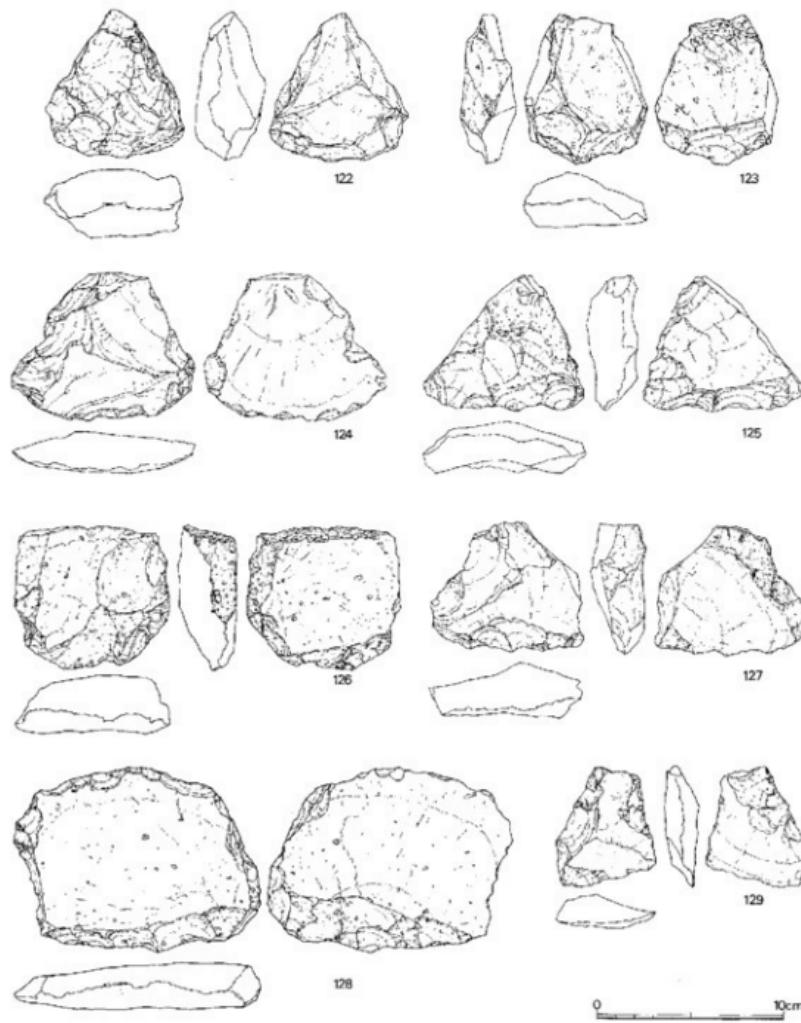
第15図 出土遺物実測図（石器8）



第16図 出土遺物実測図（石器9）3/4



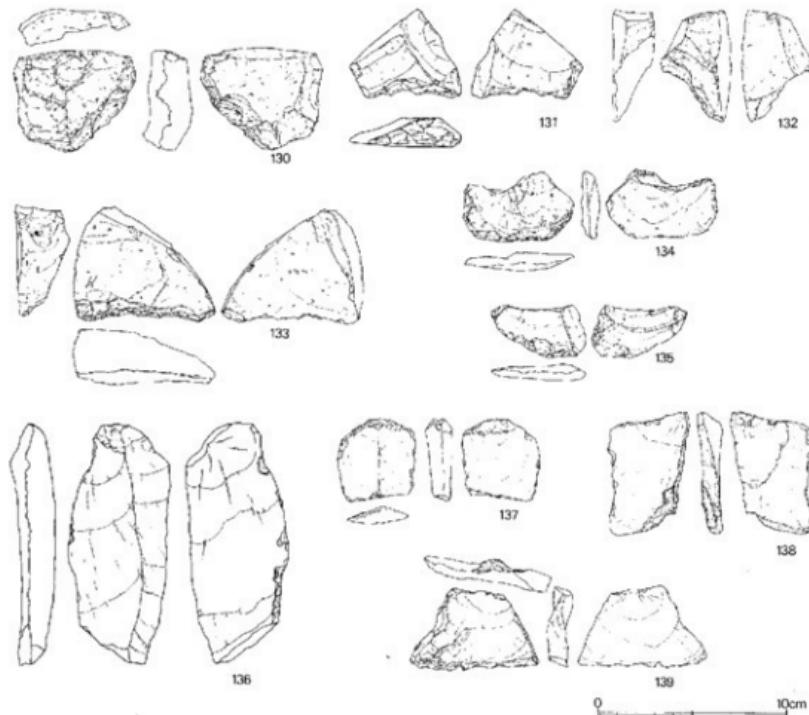
第17図 出土遺物実測図（石器10）%  
Fig. 17: Actual measurement drawing of出土遺物 (Excavated Remains) (Stone Tools 10) %



第18図 出土遺物実測図（石器11）%

**使用痕ある剝片** (第19図136~139) 西北九州の細文時代には、縦長剝片が広く存在することが先学諸氏によって指摘されているが、当遺跡では少ない。<sup>(1)</sup> 136はその中にあって大形の長い縦長剝片で、やや粗質の安山岩を利用している。打面に対して、剝片の軸は斜めになっている。主要剝離面の一側辺に、小さな使用痕がみられる。138・139は翼状剝片に似る横長剝片である。138は打点部から半折されている。139は自然面を打点とし、板状の石核から剝取されたらしく、石核の平たい底面が残る。

**磨製石斧** (第20図140~143) 4点とも完形品ではない。140はやや幅広の局部磨製石斧で、両凸の刃部だけ磨製されている。基部の肩側から破損している。142は硬質の砂岩(泥岩?)を利用して、撥状に刃部でやや幅広になる。140~142はいずれも磨滅が著しい。



第19図 出土遺物実測図 (石器12) 36

**打製石斧** (第20・21図144~152) 144は横長の剝片を素材とし、両側辺から粗い加工をして短骨形に整え、一次面の鋭い刃部をもっている。二段のゆるいくびれ部があり、着柄に利用されたのである。145・146は二等辺三角形を呈する。145と149は、一長辺と短辺とに刃部加工がされ、スクレイバーともみられるが、打製石斧と考えた。147、150~152は小型の撥形石斧である。

**石核** (第21・22図153~170) 規格的な剝片が大量に剥取されていないことから、石核も多様である。153は細石核状で、剥離面側に複数の打面調整がある。155は円盤状の石核で、主要打面は一回の加撃で作られ、周縁から寸づまりの剝片をえている。157・159は舟底状の側面観をもつ石核で、打面に当る甲板部の一側辺に多くの打面調整が施され、打角の大きい横長剝片が剥取されたことを窺わせる。158・160は任意の各方向から横長剝片がとられ、平坦な打面をもたない。161は正面には横長の剝離面があり、裏面には横位からの縦長の剝離痕がみられ、目的とする素材によって使い分けられたことを示している。162は丸円型の大型石核である。スクレイバーなどに利用された横長剝片が得られたのである。163は板状の石核で、打面調整と剝片剝離とをくり返して横長剝片を連続的にとっている。

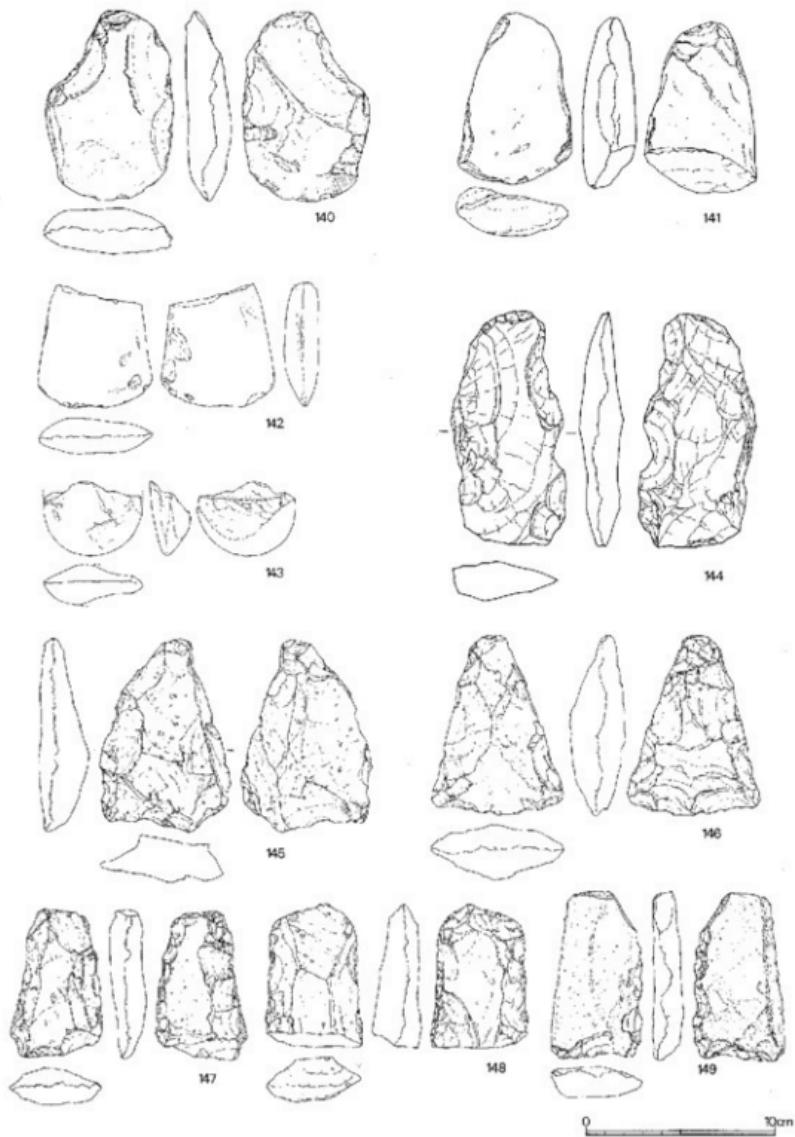
165~170は黒曜石の石核で、これまでの安山岩製に比べ小型である。169以外は、3~4 cm大の円盤原石を利用し、小剝片を得ている。169は良質の黒曜石製残核である。

**礫器** (第23図171~175) 171はほぼ全面に調整加工がなされ、重量感のある鋭い刃部をつくっている。172は偏平な長円軸礫の片面に周縁加工を施し、自然面が広く残る。171同様円刃をもち、ともに使用のためか細い刃溝れがみられる。173はやはり偏平な砂岩礫の一端に、両面から大胆な加工と細い刃部加工とが行われ、チョッピングトゥール様の大型石器としている。磨滅が著しい。174は今回出土した石器の中で、最も重量がある。大型の三角形の素材の一辺に片刃をつくっている。

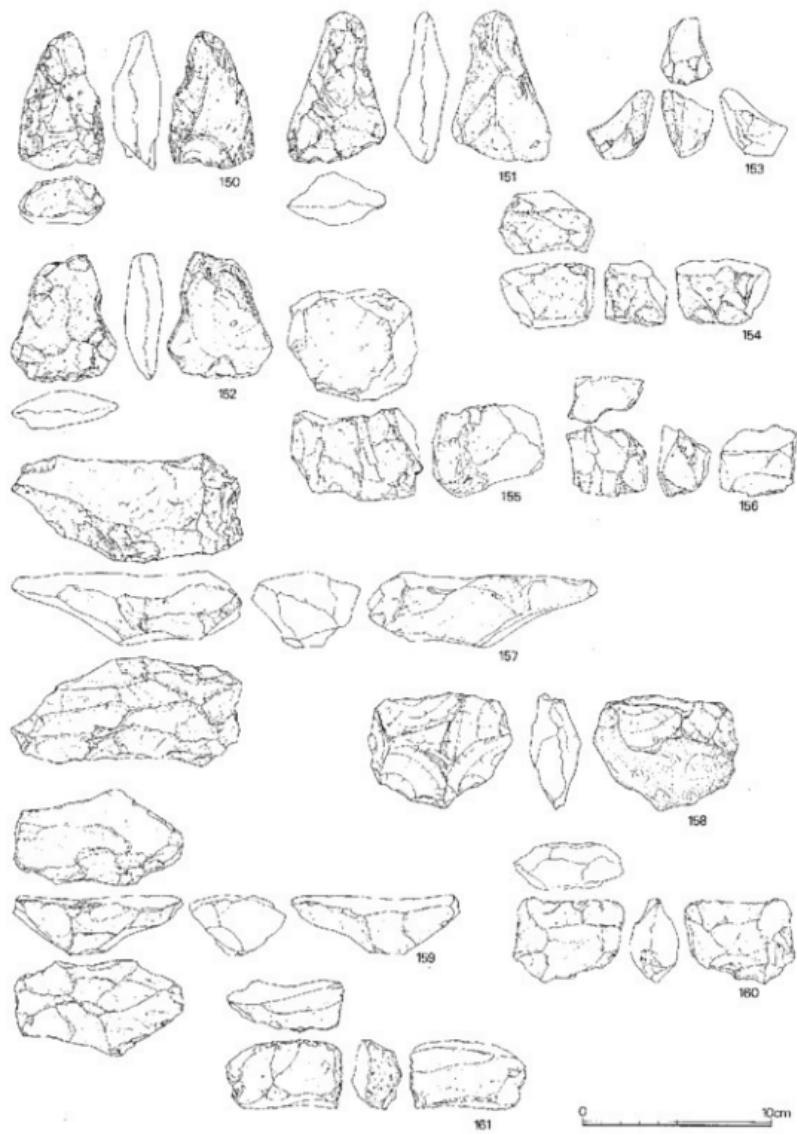
**石錐** (第23図176~178) 3点とも砂岩の長円礫を用い、短軸両側に簡単な打削を加え、櫻石錐としている。

**磨石・敲石** (第24図179~182) 4点とも円礫を利用し、179は花崗岩、他は砂岩である。179・182は両面よく磨ってある。180・181は中央部に浅い凹部がある。4点とも周縁は敲きによる溝れが著しい。

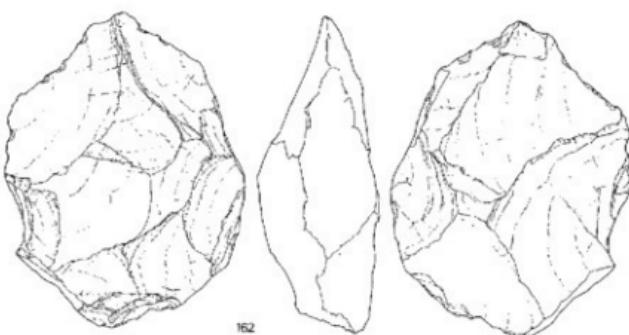
出土した3,366点の石器・剝片のうち第1層から47.2%の1,588点、第2層から1,094点(32.5%) 第3層684点(20.3%)となる。調査区ごとにみると、各区の土層の深さや面積が一定でないため単純に比較することができないが、B列の各区や第4トレンチの出土量が多く、中でも第4トレンチとB-4区が出土数・重量とも多い。これらは岸に近い調査区で、しかも宮の川や小河流の河口付近に当り、陸側からの運搬堆積物が豊かな所である。土層の項でも述べたように出土した土器・石器は二次堆積で、陸側からの流れ込みと考えられ、堆積した砂礫や流



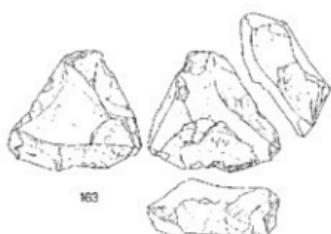
第20図 出土遺物実測図（石器13）



第21図 出土遺物実測図（石器14）分



162



163



164

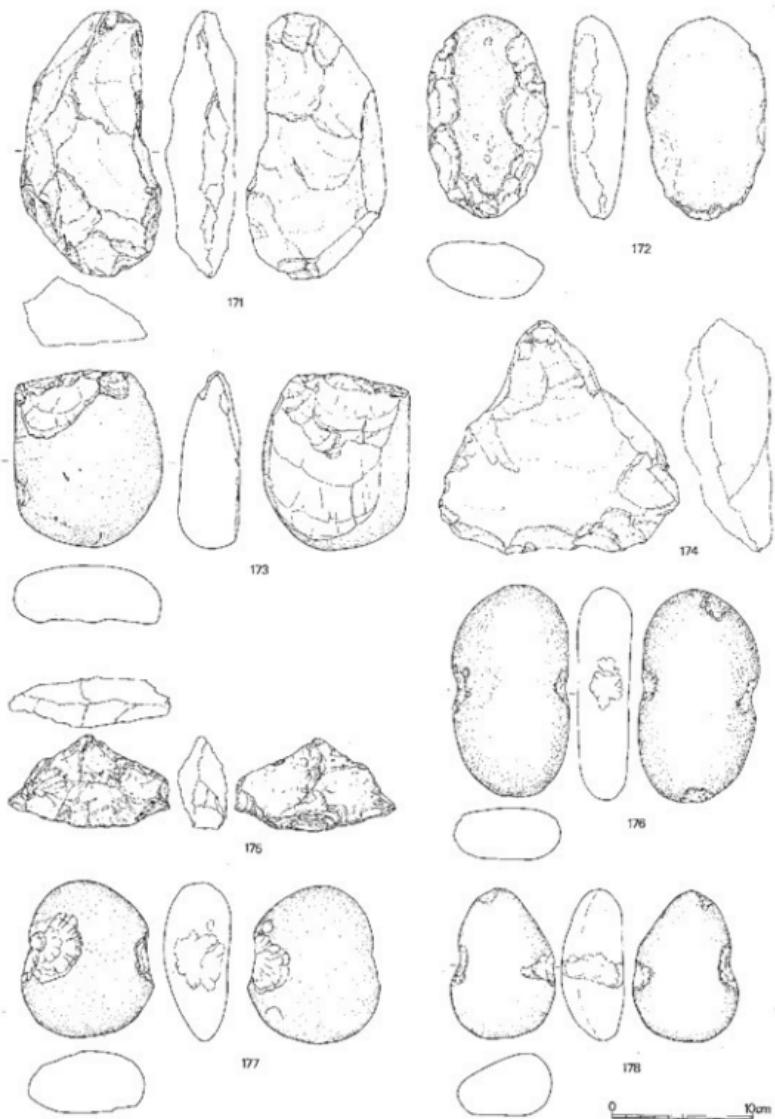
0 10cm



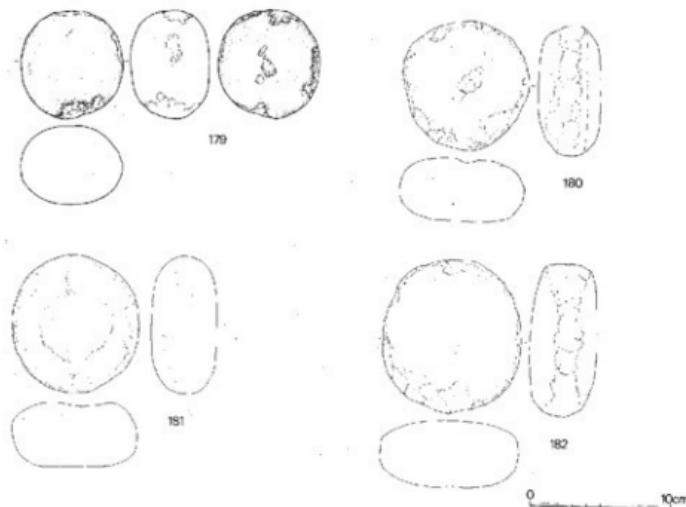
170

0 5cm

第22図 出土遺物実測図（石器15）上段② 下段④



第23図 出土遺物実測図（石器16）3/4



第24図 出土遺物実測図（石器17）3/4

れ込む河流に対応して石器の量も多いようである。

石材としては安山岩が最も多く、全体の9割近い。図示した182点の中でも158点(86.8%)が安山岩である。黒曜石(13点、7.1%)、砂岩(8点、4.4%)とつづく。安山岩には玻璃質の良質黑色安山岩もあれば、気泡の多い粗質のものも多い。一般に良質の安山岩には、精緻な調整加工が施されている。黒曜石は総出土数の10%、重量では6.3%と少ない。石核も小さい原石礫を利用したものばかりである。肉眼観察では产地推定は難しいが、中通島内では今のところ黒曜石原産地は知られておらず他地域から持込まれたのである。そのためか少ないながら良質の黒曜石が利用されている。

器種別にみると、縄文時代を主とするもののナイフ形石器もあり、長期にわたって営まれた遺跡であることが知られる。従前、上五島高校生らにより表面採用されている細石核・石鋸やサイド・ブレイドは出土しなかった。

石器組成の中で注目をひくのは、スクレイパー類の多さである。規格的な素材と定型的な調整加工をもたないが、明らかに目的的な加工をされた刃部をもつ石器群である。型式の多様さは、機能・用途の多様さを物語っているものであろう。同じ離海立地の上五島町小浦遺跡においても同様な傾向がみられ、30点の石器中19点がスクレイパー類であった。<sup>(2)</sup> 壱岐郷の浦町名切遺跡においても、不定形剥片を利用してスクレイパー類が多く出している。ただ名切遺跡では、スクレイパー類を凌駕するほどの刃器と石鎌とがあり、本遺跡の石器群のあり方とはやや異なる。

っている。黒曜石原産地が近くにあり、多量の黒曜石製刃器をもつ名切遺跡に対し、黒曜石に恵まれない西ノ股遺跡では、安山岩製スクレイパーが刃物として利用されたのかも知れない。

スクレイパー類の中で「鎌崎型スクレイパー」が提唱され、「九州西北部の外洋性漁撈による漁獲物処理用具としてよく定着し、晩期にまで継承されていった」と指摘されている。<sup>(4)</sup> 本石器群の中にも「鎌崎型スクレイパー」に類似するものを見い出しうる。遺跡の立地から、生業の主体が海へ向いていたことは当然考えられ、「鎌崎型スクレイパー」だけでなく、「石鋸」とも称される槍先形石器（石槍）もあり、石鋸もかつては出土している。漁撈具とされる石器組成はかなりそろっているといえる。

スクレイパー類の製作技術の中で留意したいのは、切（折）断技術の存在である。Ⅲ～Ⅵ類だけでなく、切断された素材を利用している例が多い。スクレイパーを意図した目的削片を得ることのできない条件下で、素材の修正として切断がされたと考えられる。とすれば、ここで不定形石器も含めてあげたスクレイパー類は、任意に得られた削片を利用して、その場その場で作られたものであると考えられる。漁獲物の処理に限らず、多目的な刃物としての役割を有していたと思われる。

（久原）

- 註 (1) 杉原莊介・戸沢充則・横田義章(1966) 九州における特殊な刃器技法 考古学雑誌第51巻第3号  
　　橋 昌信 (1978) 縦長削片—西北九州における縄文時代の石器研究1 史学論叢9  
(2) 藤田和裕・久原春二 (1987) 小浦遺跡  
(3) 安楽勉・藤田和裕 (1985) 名切遺跡、安楽勉氏のご教示による。  
(4) 横山順・田中良之 (1979) 芽岐鎌崎海岸遺跡について 九州考古学54  
(5) 福岡県教育委員会 (1977) 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第4集上巻において、  
　　柏山遺跡の折断技法が考察されている。黒曜石製縦長削片を素材とし、本遺跡とはや  
　　や異っている。

第2表 石器計測表(1)

種	図	番	出上区	層位	石	材	計測値(cm,g)			種	図	番	出上区	層位	石	計測値(cm,g)		
							長	幅	厚							長	幅	厚
8	1	B2-II	ナイフ形石器	安山岩	8.4	3.3	1.1	29.3		13	44	1T-III	スクリーパー	安山岩	3.5	4.8	0.8	14.9
+	2	B2-I	+	+	6.1	2.6	1.2	16.4	+	45	4T-II	+	+	+	2.8	6.1	1.0	14.6
+	3	C5-II	+	黒曜石	2.4	1.3	0.5	1.8	14	46	C5-I	+	+	3.6	7.5	2.5	67.3	
+	4	B2-III	鉋	安山岩	4.0	2.9	1.5	15.3	+	47	2T-I	+	+	3.7	9.3	0.9	53.9	
+	5	4T-II	+	+	5.5	3.2	1.3	20.4	+	48	B2-II	+	+	4.0	7.4	1.7	68.2	
+	6	C4-I	+	+	4.7	3.8	0.8	14.6	+	49	B2-III	+	+	4.2	8.4	1.9	38.0	
+	7	1T-II	+	+	4.2	3.9	1.0	16.9	+	50	4T-III	+	+	3.2	4.4	0.3	18.5	
+	8	C5-I	石	鉈	2.8	6.1	0.9	11.6	+	51	C5-I	+	+	3.4	5.2	1.6	25.0	
9	9	H	人	珠	4.5	2.1	0.9	11.7	+	52	H	+	+	3.5	5.4	1.0	22.2	
10	10	B2-I	石	黒曜石	4.2	2.3	0.5	2.7	+	53	B4-I	+	+	4.5	4.4	1.2	26.3	
+	11	C4-III	+	+	2.4	1.3	0.4	1.1	+	54	1T-III	+	+	4.6	5.9	0.9	22.1	
+	12	4T-II	+	安山岩	2.0	1.8	0.6	2.0	+	55	B2-II	+	+	5.1	5.5	2.2	55.2	
+	13	B2-II	+	黒曜石	1.8	1.1	0.3	0.7	+	56	4T-III	+	+	4.7	3.6	1.2	19.3	
+	14	3T-I	+	+	2.1	1.1	0.5	1.8	+	57	4T-II	+	+	4.5	4.1	1.3	21.3	
+	15	B3-II	+	+	3.0	1.9	0.7	1.9	+	58	B3-III	+	+	4.4	4.5	1.3	23.3	
+	16	B2-II	楔形石器	+	2.4	2.6	1.6	10.7	+	59	B3-II	+	+	4.9	3.2	1.3	22.5	
11	17	4T-I	石	鈍	10.2	4.7	2.5	10.0	+	60	2T-II	+	+	6.1	4.7	1.7	59.2	
+	18	B3-I	+	+	8.8	4.2	2.4	10.3	+	61	4T-III	+	+	5.6	5.1	1.5	41.2	
+	19	H	+	+	7.5	4.3	1.3	47.4	+	62	C4-I	+	+	5.2	5.3	1.7	59.8	
+	20	2T-III	+	+	7.2	5.7	2.4	91.5	+	63	2T-III	+	+	4.2	4.7	1.5	40.9	
+	21	4T-III	+	+	9.4	5.0	2.2	90.5	+	64	C5-II	+	+	4.9	4.3	1.0	24.1	
+	22	8T-I	+	+	6.3	4.5	2.2	67.2	+	65	4T-III	+	+	4.2	6.0	1.7	45.3	
12	23	C4-I	+	+	7.9	3.4	1.6	54.1	15	66	B2-I	+	+	4.2	5.5	1.0	25.1	
+	24	H	+	+	7.4	4.1	1.6	54.0	+	67	3T-I	+	+	4.7	4.9	1.2	38.4	
+	25	3T-II	+	+	6.2	3.5	1.5	46.5	+	68	1T-II	+	+	4.7	4.6	1.7	42.2	
+	26	B2-I	+	+	5.7	2.6	1.0	15.6	+	69	1T-II	+	+	6.6	4.5	1.4	33.3	
+	27	3T-I	+	+	5.2	2.0	1.5	14.5	+	70	4T-II	+	+	5.1	6.4	1.7	41.3	
+	28	B2-I	+	+	6.4	4.3	2.3	29.9	+	71	2T-I	+	+	5.6	5.0	1.8	59.8	
+	29	B4-II	+	+	5.9	3.0	1.3	21.8	+	72	C5-I	+	+	6.8	6.1	2.2	78.1	
13	30	B5-II	スクレーパー	+	10.8	6.4	2.3	150.0	+	73	H	+	+	5.3	6.0	2.4	76.7	
+	31	B5-II	+	+	8.6	5.16	2.6	140.0	+	74	3T-I	+	+	4.2	2.5	1.3	20.9	
+	32	2T-I	+	+	3.7	2.7	0.8	9.9	+	75	4T-I	+	+	6.4	5.8	2.0	78.5	
+	33	C4-III	+	+	4.1	3.4	1.2	15.9	+	76	B2-II	+	+	4.8	5.7	2.0	77.0	
+	34	B2-II	+	+	9.9	5.0	3.5	160.5	+	77	4T-I	+	+	3.4	7.9	0.9	11.3	
+	35	B5-II	+	+	8.0	3.4	2.05	64.2	+	78	1T-II	+	+	4.7	4.0	1.8	38.7	
+	36	1T-III	+	+	7.6	3.9	1.3	36.9	+	79	C4-II	+	+	6.4	5.8	1.6	190.1	
+	37	4T-I	+	+	8.6	4.8	1.7	65.8	+	80	B3-III	+	+	3.9	3.0	1.3	20.1	
+	38	4T-II	+	+	6.0	9.0	2.4	166.6	+	81	4T-II	+	+	4.0	5.9	1.2	32.4	
+	39	2T-I	+	+	4.3	8.0	1.9	50.1	+	82	2T-I	+	+	5.1	4.3	1.6	51.1	
+	40	2T-III	+	+	6.5	5.2	1.4	50.1	16	83	2T-I	+	+	3.7	6.9	1.1	46.0	
+	41	C4-I	+	+	6.2	3.2	1.3	23.3	+	84	4T-II	+	+	3.2	4.8	1.5	27.2	
+	42	B3-II	+	+	6.5	3.8	1.2	31.2	+	85	B2-II	+	+	4.0	6.1	1.8	49.0	
+	43	C4-I	+	+	3.1	3.7	0.8	13.4	+	86	C5-I	+	+	3.5	4.2	1.2	14.7	

\*出土区・層位の欄の日は、表面採集を意味する。

第3表 石器計測表 (2)

排	回	出	土	区	器	種	石	材	計	測	値	(cm, g)
番	号	番	号	位			種	材	大	長	幅	重
16	87	B	5	-II	スクレイバー	安山岩	4.4	5.3	1.5	38.1		
*	88	C	5	-II	*	*	3.6	4.3	1.4	17.2		
*	89	B	2	-I	*	*	3.2	6.0	1.9	37.5		
*	90	B	2	-II	*	*	3.5	5.7	1.1	21.3		
*	91	1	T	-II	*	*	3.6	3.6	0.6	9.5		
*	92	2	T	-II	*	*	5.6	6.1	2.2	70.2		
*	93	3	T	-I	*	*	3.9	4.7	1.7	34.3		
*	94	B	3	-III	*	*	5.7	3.5	1.3	36.9		
*	95	4	T	-III	*	*	4.5	7.0	2.2	52.8		
*	96	C	3	-III	*	*	4.4	6.1	1.2	33.9		
*	97	C	5	-I	*	*	3.4	4.0	1.3	20.4		
*	98	B	5	-II	*	*	3.5	4.5	0.9	13.3		
*	99	*	*	*	*	*	4.6	4.4	0.9	22.3		
*	100	1	T	-III	*	*	2.7	4.5	1.2	19.5		
*	101	B	5	-II	黒曜石	3.3	3.7	0.8	12.1			
*	102	*	*	*	安山岩	4.9	4.1	1.7	37.6			
*	103	C	3	-II	*	*	4.8	4.8	1.8	46.4		
*	104	3	T	-I	*	*	4.5	5.0	1.7	48.4		
17	105	B	2	-I	*	*	4.5	6.3	2.4	76.5		
*	106	D	3	-I	*	*	4.2	6.3	1.7	51.3		
*	107	C	5	-I	*	*	3.2	4.3	0.9	19.5		
*	108	H	*	*	*	*	5.2	7.3	1.9	90.8		
*	109	H	*	*	*	*	5.4	8.6	2.2	94.5		
*	110	B	3	-I	*	*	3.8	5.9	1.8	44.8		
*	111	C	5	-I	*	*	3.3	5.8	1.2	29.8		
*	112	C	4	-I	*	*	4.8	3.5	1.5	30.7		
*	113	B	3	-III	*	*	4.6	4.0	1.2	21.5		
*	114	H	*	*	*	*	6.4	3.5	1.7	39.7		
*	115	2	T	-I	*	*	6.4	6.8	2.8	150.0		
*	116	4	T	-III	*	*	4.1	4.2	2.1	47.8		
*	117	4	T	-III	*	*	4.3	5.1	2.2	52.0		
*	118	C	4	-I	*	*	2.8	3.0	0.6	7.2		
*	119	B	4	-II	*	*	2.9	2.5	0.9	8.5		
*	120	C	4	-II	*	*	6.3	6.2	3.0	160.0		
*	121	B	2	-I	*	*	6.1	5.7	2.8	122.7		
18	122	B	4	-II	*	*	7.8	7.1	3.5	200.0		
*	123	H	*	*	*	*	7.8	6.5	2.5	150.0		
*	124	3	T	-II	*	*	7.5	9.7	2.1	176.0		
*	125	2	T	-II	*	*	7.0	8.3	2.6	160.0		
*	126	H	*	*	*	*	7.4	8.1	3.1	160.0		
*	127	B	2	-III	*	*	6.9	8.0	2.8	150.5		
*	128	H	*	*	*	*	9.9	12.1	2.5	410.0		
*	129	4	T	-III	*	*	6.0	5.3	1.9	51.6		
19	130	B	3	-III	*	*	5.4	6.3	2.2	88.4		
*	131	1	T	-III	*	*	4.5	5.6	1.5	39.3		
*	132	2	T	-II	*	*	5.9	3.6	2.2	42.5		
*	133	H	*	*	*	*	5.8	7.3	2.3	119.7		
*	134	2	T	-II	*	*	3.6	5.8	0.9	19.5		
海	195	C	5	-I	スクレイバー	安山岩	2.6	4.6	0.9	11.1		
*	136	5	T	-II	使用痕のある剝片	*	12.6	5.3	2.0	130.5		
*	137	4	T	-II	*	*	4.2	4.0	1.5	26.8		
*	138	C	5	-I	*	*	5.9	4.1	1.2	27.1		
*	139	C	3	-I	*	*	4.4	6.8	1.0	33.0		
20	140	H	磨製石斧	*	*	*	10.0	6.7	2.3	190.0		
*	141	H	*	*	*	*	9.0	5.7	2.6	190.5		
*	142	5	T	-I	砂岩	6.2	5.7	1.8	95.5			
*	143	B	2	-II	安山岩	3.9	5.1	1.9	38.0			
*	144	4	T	-I	打製石斧	*	12.5	5.8	2.3	170.0		
*	145	H	*	*	*	*	10.1	6.6	2.6	180.0		
*	146	4	T	-II	*	*	9.5	6.9	2.8	151.0		
*	147	C	4	-III	*	*	7.8	4.8	1.8	85.8		
*	148	D	5	-II	*	*	7.6	5.0	2.6	107.9		
*	149	H	*	*	瑪瑙	8.7	4.8	1.6	100.9			
21	150	C	3	-I	安山岩	7.1	4.5	2.5	89.8			
*	151	5	T	-I	*	*	7.6	5.1	2.4	84.2		
*	152	D	3	-II	*	*	6.8	5.5	1.9	71.3		
*	153	3	T	-II	石核	*	3.4	2.8	2.3	26.2		
*	154	B	4	-II	*	*	3.4	5.0	3.2	80.2		
*	155	2	T	-II	*	*	5.8	6.8	4.7	240.0		
*	156	B	2	-III	*	*	3.5	3.9	2.6	46.3		
*	157	H	*	*	*	*	5.3	12.0	3.7	260.5		
*	158	3	T	-III	*	*	5.8	7.7	2.6	116.1		
*	159	C	4	-I	*	*	5.1	8.9	3.2	123.0		
*	160	4	T	-II	*	*	4.5	5.6	2.5	70.0		
*	161	4	T	-I	*	*	3.5	6.1	2.5	68.0		
22	162	1	T	-I	*	*	17.1	13.0	6.4	1027.0		
*	163	H	*	*	*	*	6.8	7.2	3.2	139.0		
*	164	B	4	-II	*	*	5.1	5.4	3.3	104.5		
*	165	4	T	-I	黒曜石	2.3	1.8	2.8	7.1			
*	166	B	5	-II	*	*	2.2	2.5	1.6	9.9		
*	167	4	T	-III	*	*	2.5	2.1	1.2	12.4		
*	168	5	T	-III	*	*	2.4	3.5	2.1	19.6		
*	169	5	T	-II	*	*	4.6	3.6	1.1	18.5		
*	170	D	1	-II	*	*	3.1	3.0	1.5	15.7		
23	171	1	T	-II	碧玉	安山岩	18.9	9.9	4.8	1005.0		
*	172	1	T	-III	*	*	14.5	8.5	4.0	640.0		
*	173	4	T	-I	砂岩	12.6	10.5	4.3	860.0			
*	174	2	T	-III	安山岩	16.2	17.0	3.9	1027.0			
*	175	B	5	-II	*	*	6.7	11.5	3.3	230.0		
*	176	1	T	-I	石核	15.1	8.2	3.8	690.0			
*	177	4	T	-II	*	*	11.2	9.3	4.7	630.0		
*	178	4	T	-II	*	*	10.6	7.5	4.4	430.0		
24	179	4	T	-II	磨石・敲石	花崗岩	7.6	7.2	5.6	440.0		
*	180	2	T	-II	*	*	9.3	8.9	4.4	530.0		
*	181	3	T	-II	*	*	9.8	8.8	4.6	600.0		
*	182	H	*	*	*	*	10.8	9.8	4.7	810.0		

図 版



遺跡遠景

図版3



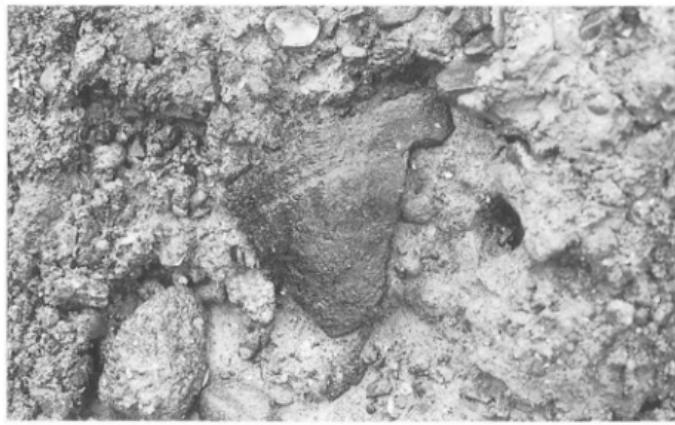
調査の状況（南方より）



調査風景



調査風景



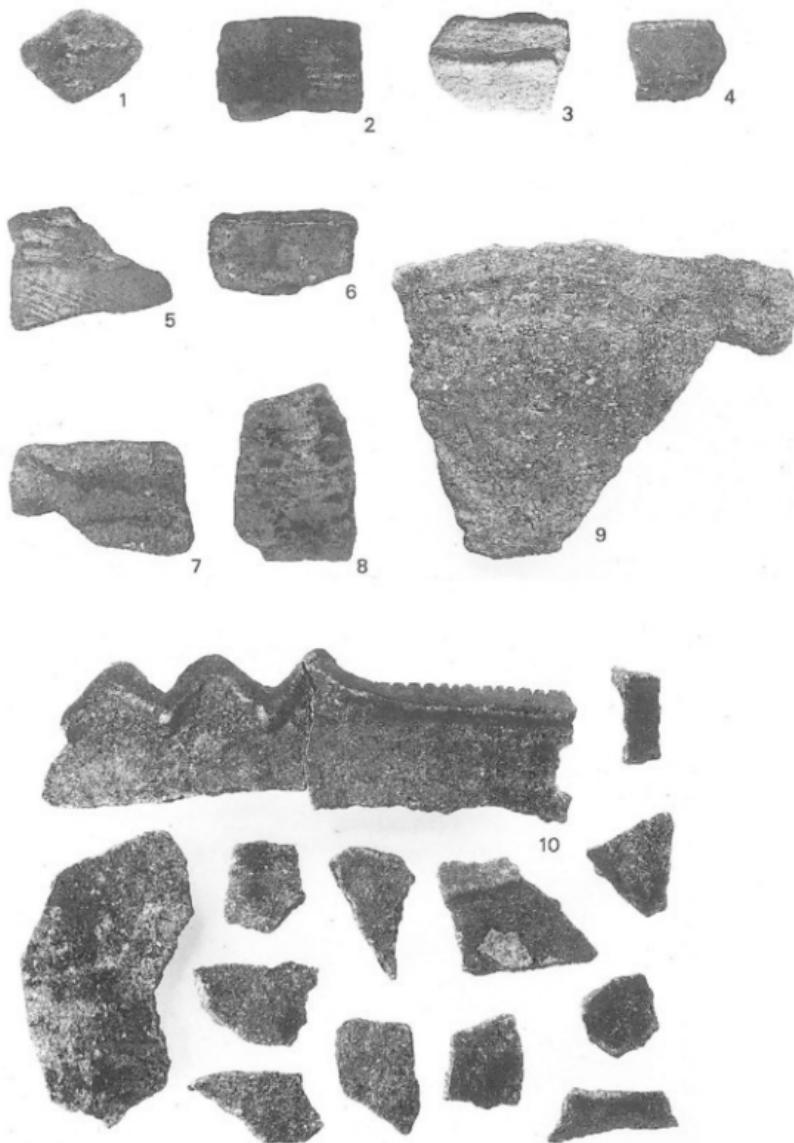
遺物出土状況

図版5



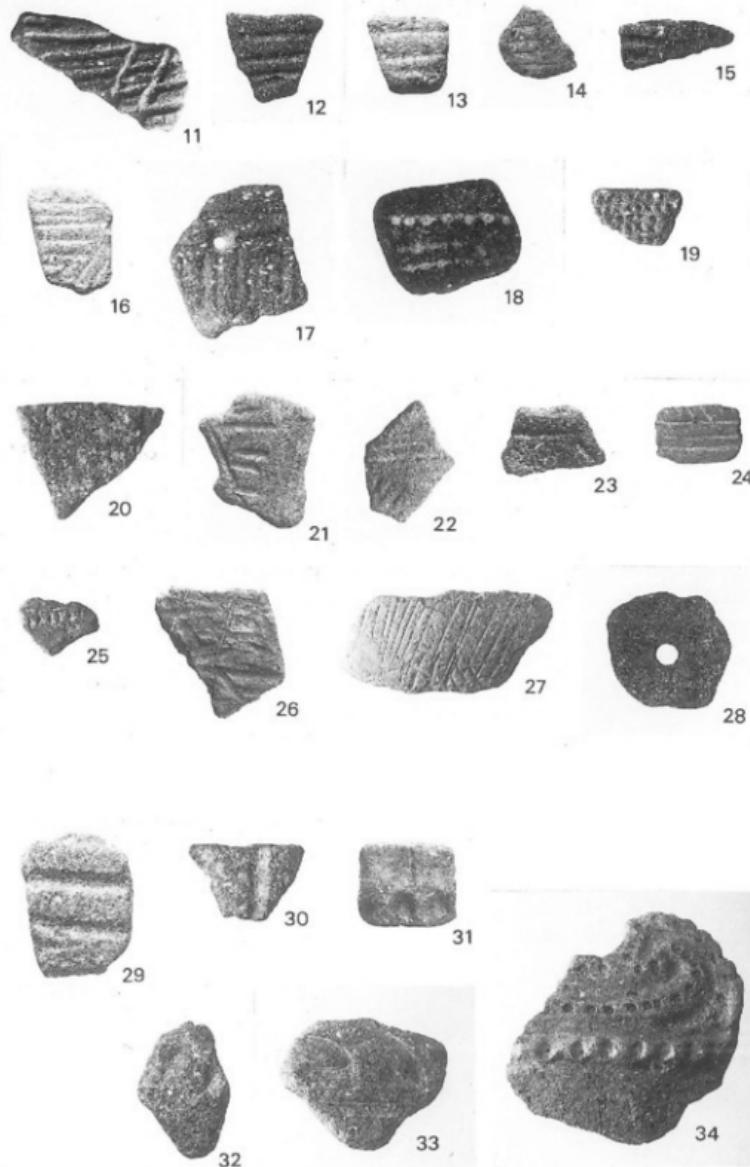
土層の状況

図版 6



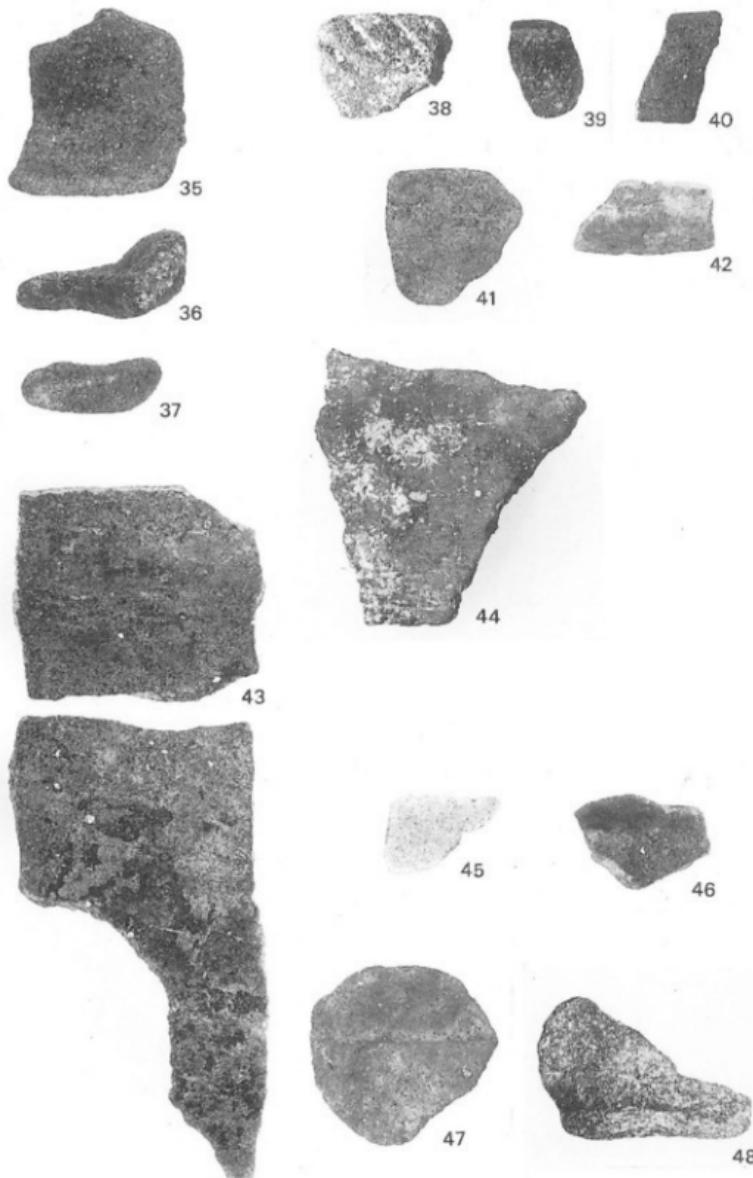
出土遺物(土器 1)

図版 7



出土遺物(土器 2)

図版8

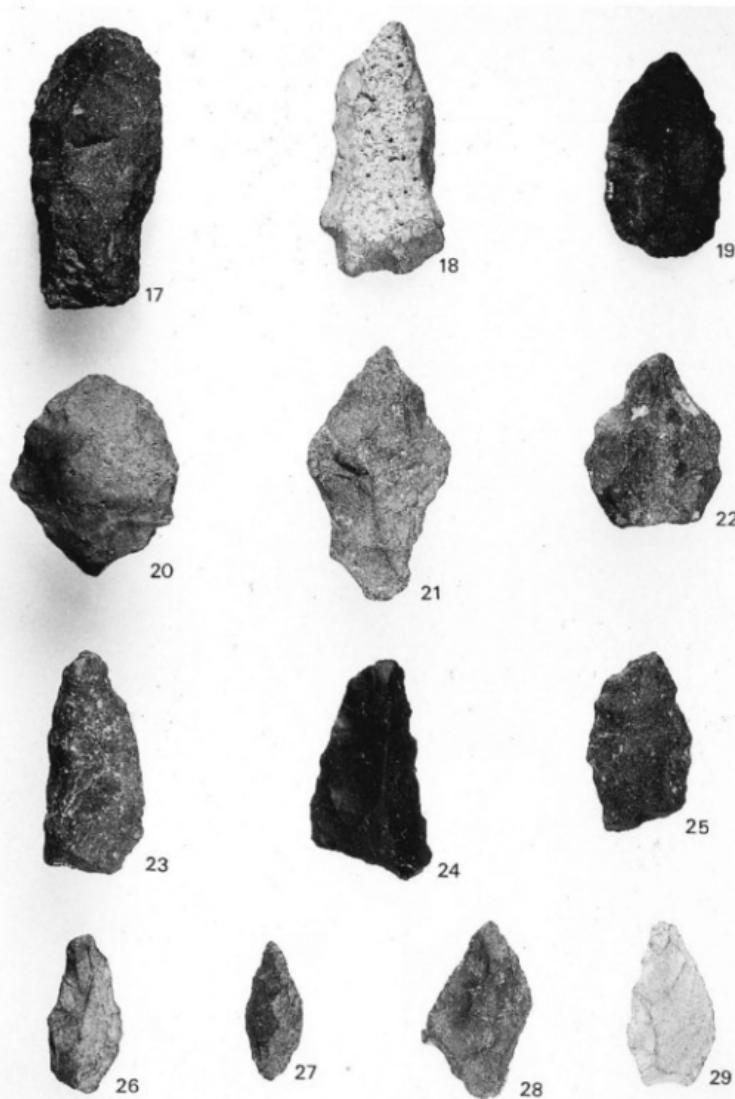


出土遺物(土器.3)

図版9



出土遺物(石器 1 32、9のみ36)



出土遺物(石器 2 32)



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42

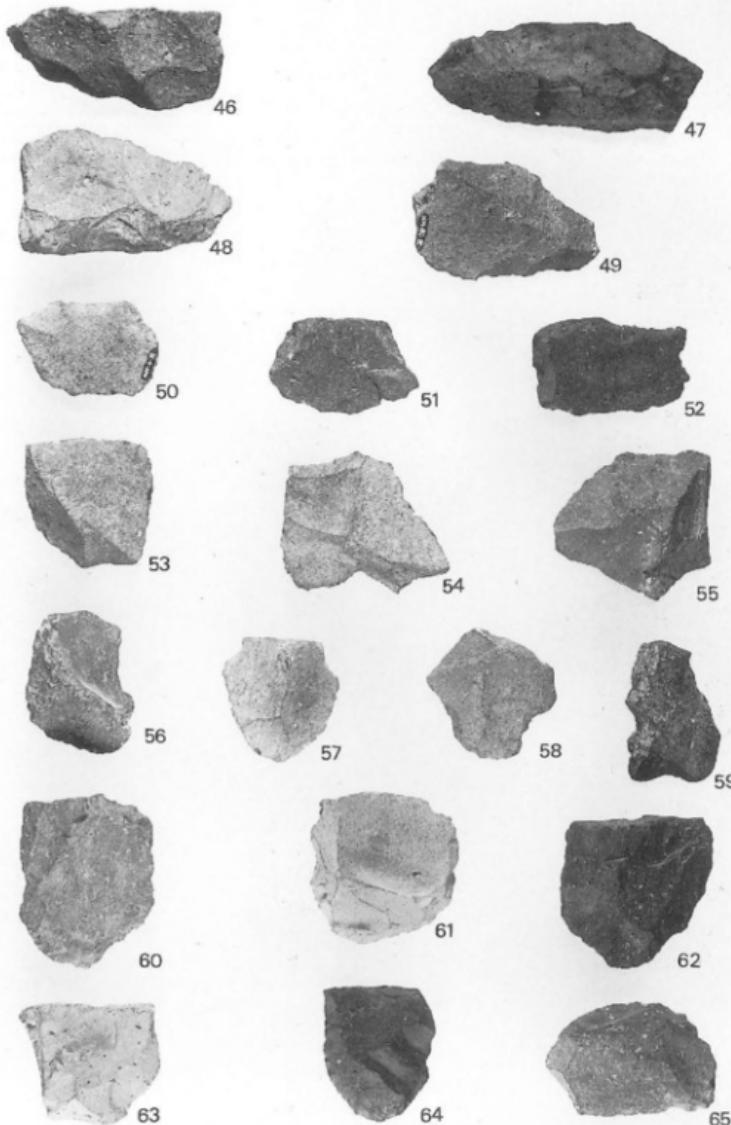


43

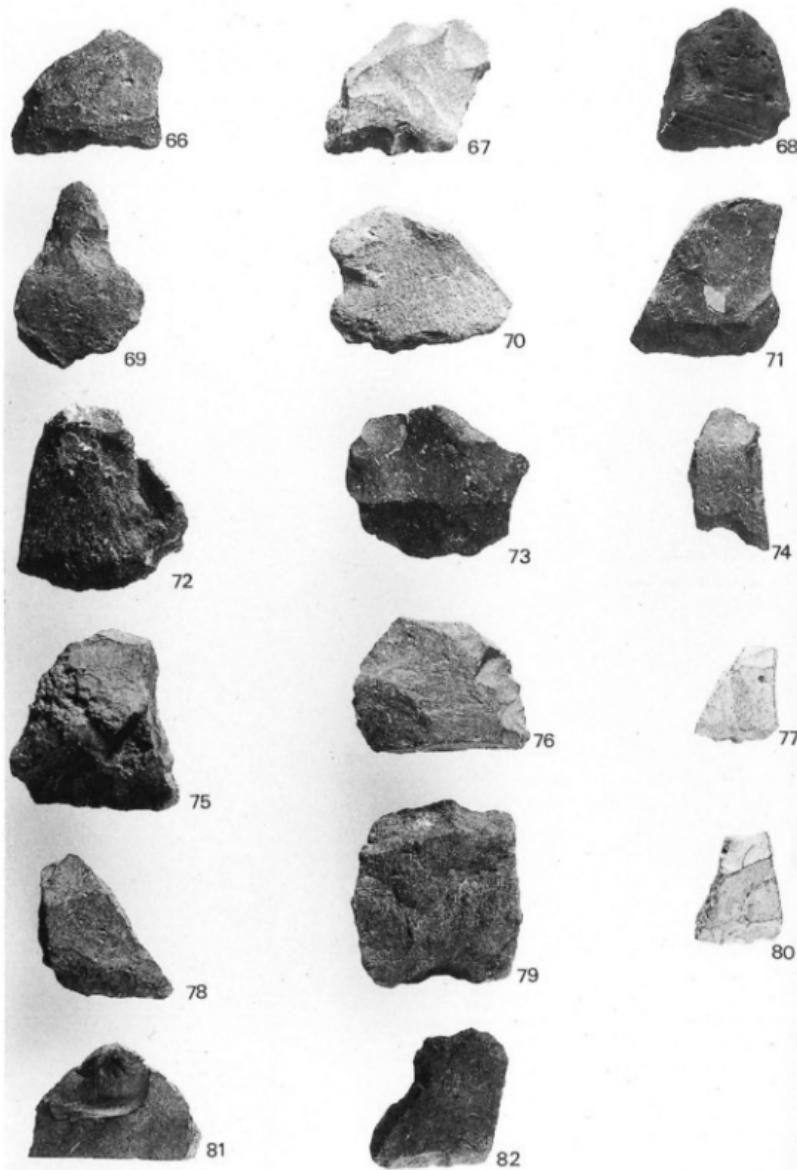


45

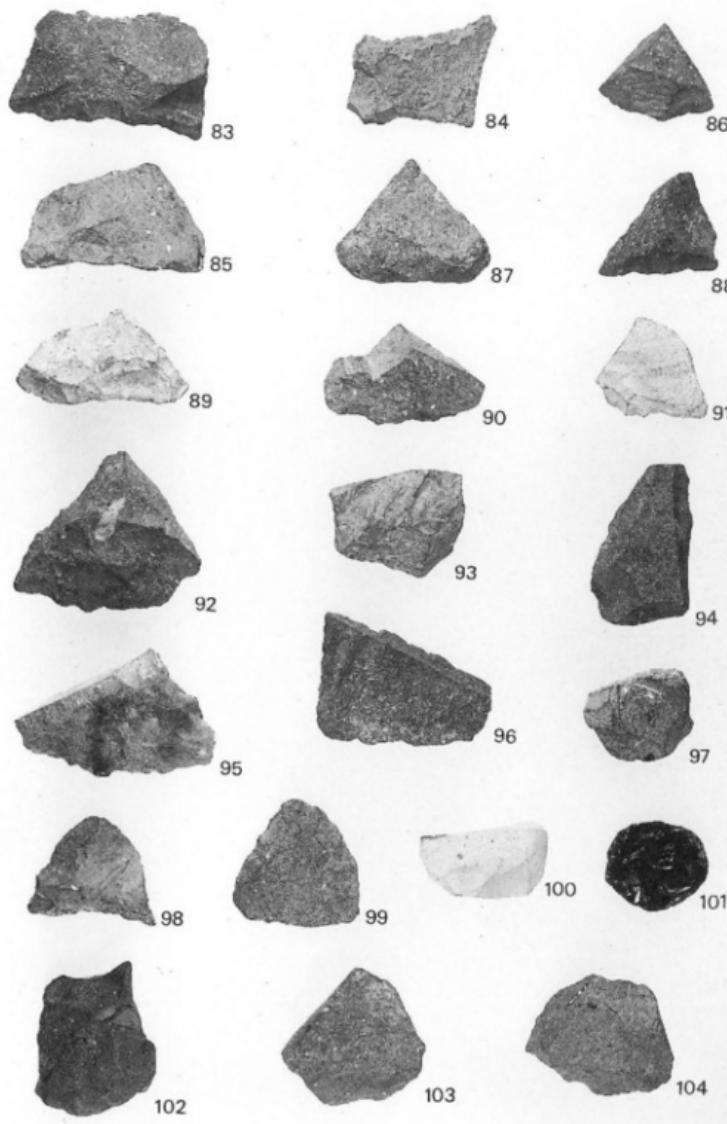
出土遺物(石器 3 分)



出土遺物(石器4 : 3)

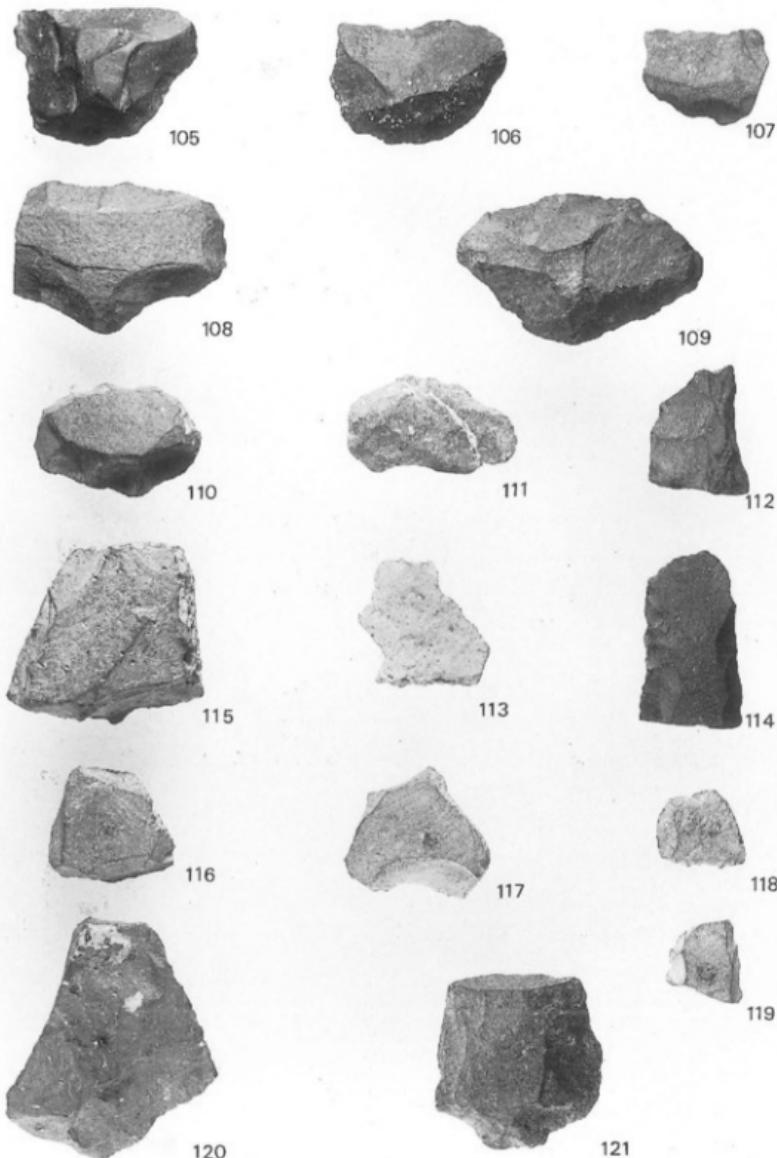


出土遺物(石器 5 3/4)



出土遺物(石器 6 3/4)

圖版15



出土遺物(石器 7 · 3/2)



122



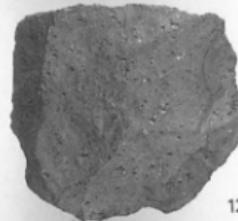
123



124



125



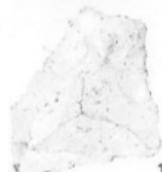
126



127

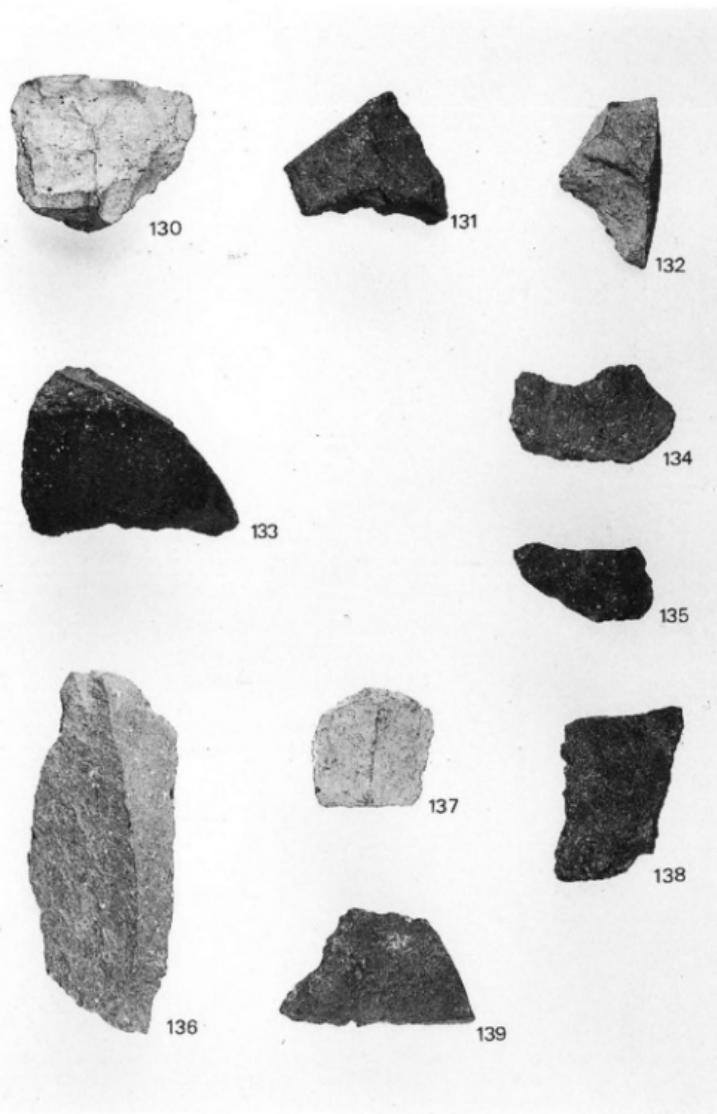


128

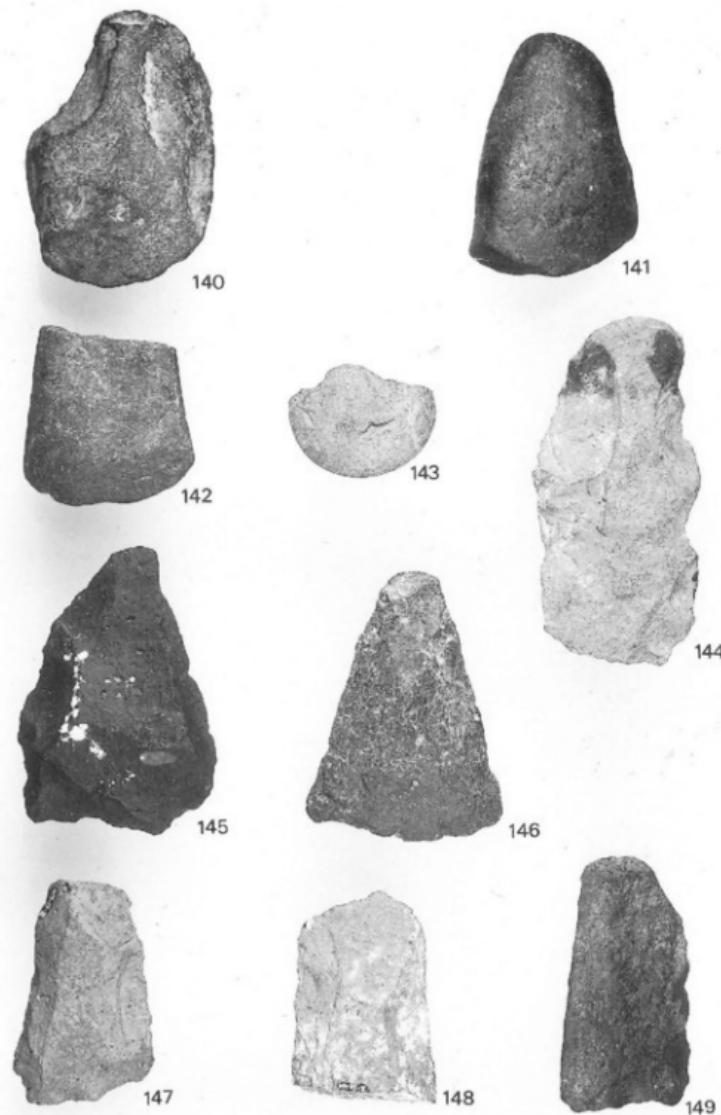


129

出土遗物(石器 8 件)



出土遺物(石器 9 例)



出土遗物(石器10 3/4)



150



151



153



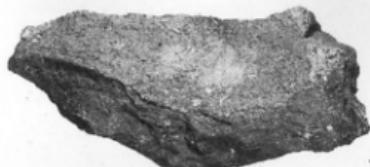
152



155



154



157



156



159



158



161



160



162



163



164



165



166



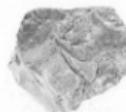
167



168

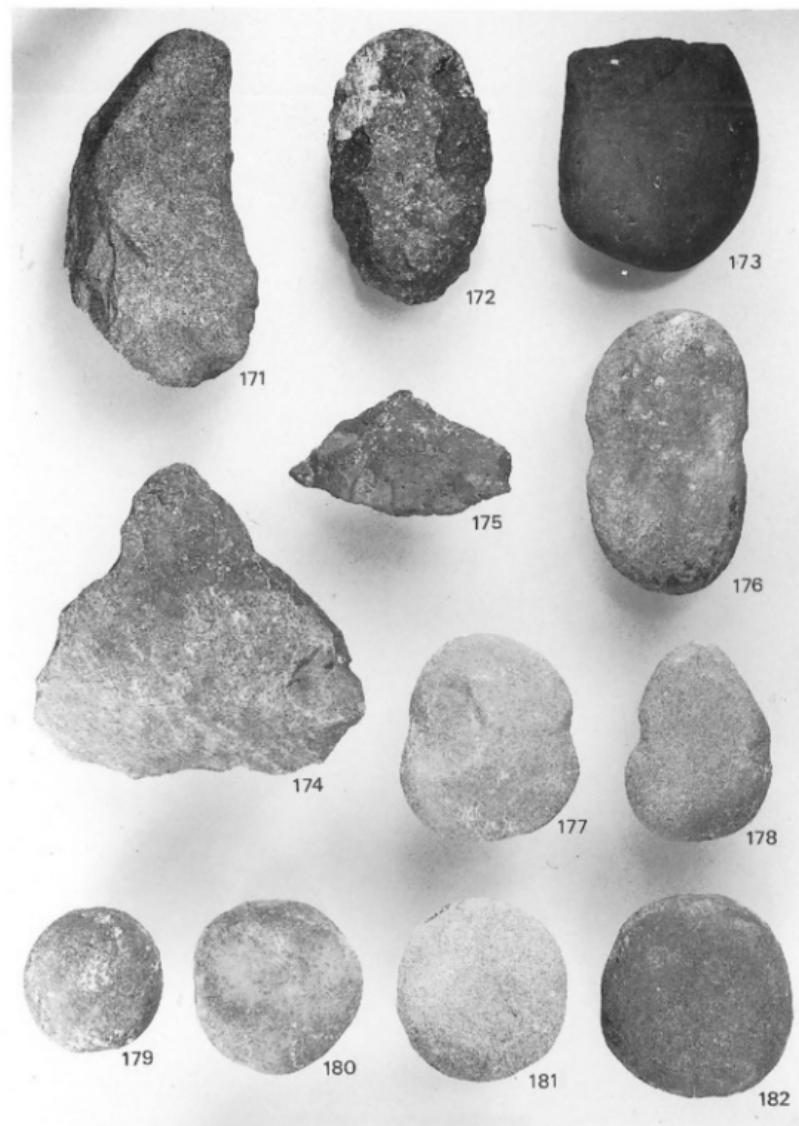


169



170

出土遺物(石器12 上段 $\frac{1}{2}$ 、下段 $\frac{1}{2}$ )



出土遺物(石器13 36)

新魚目町文化財調査報告書第2集

西ノ股遺跡

昭和63年3月

発行 長崎県新魚目町教育委員会  
〒857-45 南松浦郡新魚目町桜津郷491

印刷 S K 印刷  
〒852 長崎市宝栄町18-15